松と藤芸妓の替紋

三遊亭圓朝

鈴木行三校訂・編纂

青空文庫

一

今日より改まりまして雑誌が出版になりますので、社中かわる／〃＼持前のお話をお聴に入れますが、私だけは相変らず人情の余りお長く続きません、三冊或は五冊ぐらいでお解りになりまする、まだ新聞に出ませんお話をお聴に入れます。これは明治四年から六年まで、三ケ年の間お話が続きます、実地あったお話でございます。さて俗語に苦は楽の種、楽しみ極まって憂いありと申しますが、苦労をなすったお方でなければ只今、お楽になって入らっしゃるものはございません。大臣参議と雖も皆戦争の巷をくゞり抜け、大砲の弾丸にも運好く中らず、今では堂々たる御方にお成り遊ばして入らっしゃるのでございますがまだ開けません時分、亜米利加という処は何ういう処か、仏蘭西はどんな国だか分らない中に洋行をなさいまして、然うしてまた何うも船の機械も只今ほど宜く分っても居りませんでしたのに、危険を凌ぎ、風波を冒して大洋を渡りなど遊ばして苦心をなすったから、只今では仮令お役所へお出で遊ばさないでも、年金を沢山お取り遊ばすというのも、その苦労をなさいましたお徳でございます、だから余り楽をしようと思うと、却って是が苦しみになりますことで、私などは毎日喋って居りますから、ちと楽を為ようと思って、一日喋らずに居たら何うだろうというと、これが苦労の初まりで、一日黙って居るくらい苦しみはありません。何もそんなに黙って居るにも及びませんが、退屈でなりませんから、これは堪らぬ、ちとそろ〳〵表を歩いたら楽に成るだろうというと、これが苦しみの初まりで、最う寝足になって居りますから歩くと股がすくんでまいり、歩行が叶いませんから、そこらの車へ乗って家へ行ったら楽だろうと思って、車へ乗ると腰が痛くなって堪らないから、仰向に寝たらば楽になるかと思うと、疝気が痛くなったりしていけませんから、廊下へ出て躍ったら宜かろうというように、実に人は苦の初めを楽しむと云って、苦労の初めばかり楽しみますことを考えますものでございます。「瓶に挿《さ》す花見ても知れおしなべてめづるは捨る初めなりけり」という歌の心は、詠めは誠にどうも総々とした此の牡丹は何うだい、宜いねえ水を上げたところは、と珍らしがって居りますが、長く活けて置けばばら〳〵と落ちて来ますから、あゝ穢ない打棄ってしまえと、今度は大山蓮華の白いのを活けこの花の工合はまた無いと云ってゝも、末になると黄色くなってぱら〳〵落ちますから捨てゝ、今度は秋草が宜いと云った所が、此れもそう何時迄も保ちは致しません、直に萎れてしまいますから挿換るというように、世の中の事は此の通りでございます。マア何でも苦労をなさらんければいかんということで。これは松平肥後様の御家来で、若い中にさん／〃＼道楽を致し、青森県の方にお出でがありまして、ちょうど函館の戦争に出逢って危い処を免れ、よう〳〵の事で世界が鎮まってから横浜へ出てまいり、外国人と取引を致し、図らざる処の幸福を得ました処から、まだ東京は開けません時分故、洋物店を神田美土代町へ開きましたが、大層繁昌致しました。此のお方は苦労人の果ゆえ、仮令芸人を扱っても、芸者を相手にしても、向うの気に入るような事ばかり云います。今日は身装の拵えがくすんでも居ず華美でも無い様子、ちょっと適当の装に拵え、旧九月四日の事でございましたが、南部の藍の万筋の下へ、琉球の変り飛白の下著、まだ其の頃は余り兵児帯は締めま

せん時分だから、茶献上の帯を締め、象牙へ四君子の彫ってある烟管筒が流行ったもので、烟草入れは黒桟に金の時代の宜い金物を打ち、少し色は赤過ぎるが、珊瑚の六分半もある緒締で、表付ののめりの駒下駄、海虎の耳付の帽子が其の頃流行ったものゆえ、これを冠り上野の広小路を通り掛ると、大茂の家から出て来ましたのは、其の頃数寄屋町にいた清元三八という幇間でございますが、幇間にも種々有りまして、野幇間もあれば吉原の大幇間もあります、町の幇間でも一寸品の宜いのもあれば、がら〳〵致して、突然人の処へ飛込んで硝子戸へ衝突かり、障子を打毀すなどという乱暴なのもありますが、この三八は誠に人の善い親切な男で、真実に世話をするので人に可愛がられますけれども、芸は余り宜くは有りません。四入青梅の小さい紋の付きました羽織を着て、茶献上の帯を締め、ずか〳〵と飛出て来て、三橋の角で出会いました。

旦「おい師匠々々」

三「これは旦那……何方へ」

旦「此処で君に遇おうとは思いきやだ」

三「先達ては誠に有難う、あの時旦那がお帰りになったのを知らないで、御酒を戴き過して、気を許して寝てしまい、お帰りになった後で目が覚めて驚きましたが、二度目にお目にかゝった時、寝たの寝の字もおっしゃらないなぞてえのは、実に貴方のような苦労をなすったお方は沢山無えって、蔭でのろけて居りますんで」

旦「君に惚られちゃア有難てえフヽヽ」

三「からかっちゃアいけませんが、何方へ入らっしゃいました、此の間お宅へお寄り申そうと思いまして参ると、番頭さんが何とか云いましたっけ、治平さんかえ、武骨真面目なお方で、※とお店に坐っている様子てえものは、実に山が押出したような姿で、何となく気がつまりましたから、裏口から這入ってお内儀さんにお目通りを致しましたが、坊ちゃんは大層大きくお成んなさいましたな」

旦「彼は坊じゃない嬢だよ」

三「へえお嬢さんでげすか、そう仰しゃれば何処かお優しい品の宜いところが有りましたよ」

旦「何うも君は押付けたような事をいうのが面白い……君に出会ってこのまゝ別れるのは戦争の法には無えようだから、何だえ何処かでお飯を喰べてえが付合わねえか」

三「これは恐れ入りやすな、私の腹の空った顔が貴方にちゃんと解るなんてえのは驚きやしたなア、何うか頂戴致したいもので」

旦「君何処へ往ったのだえ」

三「なに少し大茂へちょいと」

旦「周旋かえ」

三「いえ然うじゃア無いんですが、方々へ種々な会がありますと、ビラなんぞを誂えられてるんでげすが、御飯を召上るてえなら是非此処じゃア松源さんでげしょう」

旦「松源てえば彼処で五六度呼んだ小しめだのおいとだのと云う好い芸者の中で、年若の何とか云ったッけ、美代ちゃんかえ」

三「えゝ美代ちゃん、へえ美代吉」

旦「彼は好い娘だね、品が有って実にお嬢さん然として居るね」

三「成程彼は旦那のお気に入りましょうよ、旦那は種々な真似をなすって諸方で食散かして居らっしゃるから、却ってあんなうぶなお嬢さん筋で無くちゃアいけますまい、彼は極温順くって宜うございますから、お浮れなすっちゃアどうです」

旦「君は直に然う取持口をいうから困るよ、併し色気は余所にして何となく何うも己は彼が慕わしいね」

三「美代ちゃんも然ういって居ますよ、美代ちゃんも旦那の事ばかり蔭で褒めてまして、あんな好い旦那は無い、あの旦那に会うと何となく心嬉しいてッてます」

旦「なにお幇間を云っちゃアいけない、あれは抱えか又娘分かえ」

三「あれは娘分なんでげすが、彼処の婆ほど運の好い奴はありません、無闇に金ばかり溜めて高利を取って貸すんでげすが、二月縛りで一割の礼金で貸しやアがって、彼の位の者は沢山ア有りませんね、それが何うもあゝいう奴は娘を抱えると、直に美代ちゃんのお母が死んでしまうと、往き所の無えのを幸にずる〳〵べったりに娘に為ちまッたんでげすが、あんな運の好い人はありやせん」

旦「何か情夫でも有るのかえ」

三「なにそんな者はありません、只温順しい一方で、本当にまだ色気の味も知らない位でげす、付合で何処かへ往けなんてえと御免なさい、お母さんに叱られると云っている位なんで」

旦「何うかして彼の娘を呼出す工夫をして居るんだが、お母に取入ってお母と付合になっちまってから、其の後彼の娘をお貸しな、上手へ往くとか、一晩泊で多摩川の鮎漁へ往こうと云っても、若い者じゃア婆さんも油断はしめえが、此方は最う四十の坂を越えて居るから安心するだろう」

三「貴方上手なんぞへ連れてって何うなさるんで」

旦「いやさ、彼の娘を連れてッて、情夫がある種を知って居るから両人しっぽり会わして遣ろうッてんだが何うだえ」

三「こりゃア恐れ入りやしたね、何うもこれは出来ない業でげすな、ちょいと玉を付けて、祝儀を遣った其の上で、情夫に会わして遣るなんてえ事は中々出来る事ちゃア有りやせん、間夫が有るなら添わして遣りたいてえ七段目の浄瑠璃じゃアねえが、美代ちゃんに然う云ったらどんなに悦ぶか知れやアしませんよ、旦那のことだから往渡り宜く家へ往って然う云ったら、美代ちゃんの母親さんも何んなにか悦びましょう、併し彼の婆は何うも慾が深えたッてなんて、彼んなのも沢山はありません、慾の国から慾を開きに来て、慾の学校が出来たら直に教員に為るてえ位な慾張で、あの肥ってるのは慾が肉と筋の間へからんで、慾肥りてえのは彼から初まったでげす……じゃア美代ちゃんの家へ入らっしゃいまし」

と三八が先に立ち数寄屋町へ這入り、又細い横町へ曲り、

旦「此方へ曲るのかえ」

三「此方へ入らっしゃい……えゝ此処で、有松屋という提灯の吊してある処で」

旦「法華宗なのかえ」

三「何でも金にさえなれば摩利支天様でもお祖師様でも拝むんで、それだから神様の紋散しが付いて居るんで……母親さん今日は、お留守でげすか……美代ちゃん今日は」

婆「あい誰だえ、安どんかえ」

三「あれが婆の慾から出る声でげすが、酷いもんで……えゝ三八でげすよ」

婆「いやだよ何だねえ、ずっとお這入りな表からお客様振ってさ」

三「御免なせえまし、へゝゝ今日は……」

婆「此の間はあれっきり来ないもんだから、わたしは本当に困ったよ、皆さんから後で話が有って……これからは持って一々来て見

せなくちゃア困るじゃアねえか」

三「ところが梅素さんの処へ往くと、びらが一ぺえ来てえるので、待って書いて貰いましたんで、大きに遅くなったんでげすが、その代り美代ちゃんはちゃんと中軸にして、そこらは抜目無くして置いた事は、後で御覧なすっても解りますが、時に今ね母親さん美土代町の奥州屋の旦那がね、ほんとに粋な苦労人で、美代ちゃんを呼んで度々お座敷も重なると、家で案じるといけないから、ちょいとお母さんにあかして仲好に成りてえと仰しゃるから、お連れ申して来ましたんで」

婆「あれまア何うもまア表に居らっしゃるの……何うぞ此方へお上り遊ばして下さい、まことに思い掛けない事で、何うぞ此方へ……師匠此方へ案内してお上げ申しておくれよ」

三「へゝゝ此方へお上んなさいまし」

旦「はい御免……お母さんお初にお目にかゝります、毎度美代ちゃんを呼んで世話を焼かしますが、何うぞ心安く……」

婆「まア何うも宜く入らっしゃいました、毎度また彼を御贔屓に遊ばして有難う存じます、宜くまア此様な狭い汚ない所へ入らっしゃいました、何時も蔭でおうわさばかり致して居ますの、何うかして一度お目にかゝって置きたいと思いまして、師匠にも然う申しましたら、その内に案内をしようと云ってくれましたが、またお楽みの処へ出ましてもお邪魔だろうからと存じて控えて居ましたが、毎度御贔屓様になりまして有難う存じます、あんな結構な袂持や合切袋や金の指環など見たこともない物を下すって、あれがお湯などに箝めて参りますから、そんな結構な物を箝めてお湯に這入るのじゃア無いよ、金より其の上に善い物は無いからと云いましても、今の若い者は開化とか何とかいう事を知って居りまして、人のいう事をば些とも聞かないで矢張箝めてお湯に這入りましたりして、ぞんざいに致しまして、何うも持ざっぺいが悪くて仕方がございません、お客様が折角のお志で下すった物を、粗末にしたり落しちゃア済まないよ、お志を無にするからと申しましても、あの通り頑是がございませんから、何時までも子供のようでございまして仕方が有りませんが、何うぞお見捨なく何時までも御贔屓を願います、此の間もあなた遅く帰って来まして、お母さんお案じでないよ、奥州屋の旦那様が外に何んな無理なお客が有っても、十二時を打ったらずん〳〵帰れと云って下すったが、そんなお客様は無いてッて何時も旦那様のお噂ばかり申して居りますので」

三「何しろ美代ちゃんをちょいと」

婆「今お湯から帰って、ちょいと二階で身化粧をして居ますよ」

旦「それは丁度好い所だった……師匠お母さんに其のオイお土産を……」

三「左様で……母親さんには是だけ……女中は慥か両人でしたねえ……これは旦那から」

婆「まア何うも有難う存じます、何ぞ旦那様へ宜しくお礼を仰しゃって下さいまし……旦那これからは何うぞ何方へ往らっしゃいまして、御膳を上りましても詰らない御散財でございますから、美代吉の所へ往って惣菜で安く食べて往こうと云うようにお心易く、ちょい〳〵入らっしゃッて下さいまし、然うすると此方でも誠に気が置けませんで宜しゅうございますから、これを御縁として何うかちょい〳〵入らしって下さいまし……お前方皆な此方へ来てお礼を申しな」

下「誠にどうも有難う存じます」
旦「いや何うもお礼では痛み入ります」
三「お母さん何か一寸お飯物を色取りして何うか……」
婆「はい畏りました……ちょいとあの美代吉や下りてお出で、美土代町の旦那様が入らっしったよ」
美「はい」
と返事をいたし、しと〳〵階子を下りて参り、長手の火鉢の前に坐りましたが髪が、結い立でお化粧の為立てで、年が十九故十九や二十という譬えの通り、実に花を欺くほどの美くしい姿で、にやりと笑い顔をしながら物数云わず、
美「よくお出でなさいました」
旦「今広小路で師匠に会ったからちょいとお母さんにお近附に成ろうと思って来たのさ」
三「美代吉さん、何うも私の方は慾でげすが、旦那の方は御厄介になって余り感心しないが、それを一緒に往くと仰しゃるのでお供をして此方へ来たのてえのは、其処に種々御親切な話が有るんで、本当に後でお聞せ申したい事が有るんでげすぜ」
美「それはほんとに嬉しい事ねえ」
婆「今お土産を戴いたよ」
美「毎度有難う存じます」
三「何か旦那の召上り物を何うかお早く」
婆「此処らでは鳥八十さんが早いから、彼処へ往って何か照り焼か何かで、御飯を上るのだから色取をして然う云って来なよ、宜いかえ、御飯は家のは冷たいから暖かいのを三人前に、お香物の好いのを持って来るように然う云ってくんな、あれさ家のは臭くていけないから、これさ人のいう事を宜く聞きなよ、それからお菓子を、なに落雁じゃアないよ、お客様だから蒸菓子の好いのを」
と下女に云附け、誂え物の来る内、何か有物でちょいとお酒が出ました。この奥州屋の新助は一体お世辞の善い人で、芸者や何かを喜ばせるのが嗜きな人だから、何か褒めようと思って方々見廻したが、何も有りません。三尺の壁床に客の書いたものが余り宜い手では無く、春風春水一時来と書いてあり、紙仕立の表装で一幅掛けてありますが、余り感心致しません。其の傍の欄間に石版画の額が掛けてありますが、葡萄に木鼠の画で何も面白い物がありません、何か有ったら褒めよう〳〵と思って床の間の前を見た処が古銅の置物というわけでもなし、浅草の中見世で買って来たお多福の人形が飾って有り、唐戸を開けると、印度物の観世音の像に青磁の香炉があるというのでなし、摩利支天様の御影が掛けて有り、此方には金比羅様のお礼お狸さま、招き猫なぞが飾って有るので、何も褒めようが有りませんから、二枚折の屏風の張交を褒めようと思って見ると、圃十郎の摺物や会の散しが張付けて有る中に、たった一枚肉筆の短冊が有りましたから、その歌を見ると「背くとも何か怨みん親として教えざりけんことぞ口惜しき」という歌が書いて有ったのを見て、奥州屋新助は恟り致しましたと云うのは、自分が二十四歳の時に放蕩無頼で父も呆れ、勘当をすると云った時に、此の短冊を書いて僕に渡し、汝の様な親に背いた放蕩無頼の奴は無いが決して貴様を怨みん、己の教えが悪いによって左様な道楽の者に成ったのだ、此の短冊は己が形見で有るから、是を持って何処へでも往けと云って、流石の父も涙を含んで私の手に渡した時に、若気の至りとは云いながら手にだに受けず、机の上に置去りにし、家を出た

此の短冊が何うして茲に有ったかと、余り思い掛ない事だから驚いたが、素知らぬ体で、

旦「美代ちゃん、屏風に張って有るあの短冊は何処から貰ったのかえ」

美「なに、あれはいけないのですよ、張交が足りないから何でも安どんが出せと云いましたから、反古の中に皺くちゃになって居たのですが、あれは私のお父さんが書きましたので」

旦「え…お前のお父さんが……何かえお前のお父さんは会津様の御家来で、松山久馬様と云って七百石取ったお方だろうね」

美「あれまア旦那何うして私の親父を御存じなの」

旦「いえなに……わしは若い時分から歌俳諧が好きであったが、風流の道というものは長崎の果の先生でも、奥州の人とも手紙の遣り取りをして交際をするものだがね、久馬様はおなくなりになって、惣領のお兄いさまは上野の戦争で討死をなすったということを聞いたが、お母さんは未だ御存生かえ」

美「何もかも旦那はよく御存じですが、私は母と一緒に上野の先の箕の輪という処へ参りましたは、前々勤めていた家来の家で有りますから、そこへ往って暫く厄介になって居ます内に、母が煩い付きましたが、長煩い故病院へ入れる事も出来ませんようになったので、仕方なく私はこんな処へ這入りましたが、その甲斐もなく一昨年の十一月なくなりましたよ」

旦「え、おかくれかい、それじゃアまアお母さんを救うためにお前は芸者になって、云いつけもしない世辞をお客に云って居るのだろうが、宜くまア親のために苦労をして居るねえ」

美「はい、私は外に親戚頼りも有りませんが、只た一人仲の兄のある事を聞いて居ましたが、若い時分道楽で、私が生れて間もなく勘当になって家出をしましたそうですが、随分気性な人ゆえ戦争にでも出て討死もしかねない気性ですから、大方死んでゞもしまったろうと常々母親が申して居りましたが、その兄さえ達者なれば会う事も有りましょうが、尤も小さい時に分れたのでございますから、途中で会っても顔は知れませんけれども、何卒して生きて居るなら、その兄に会いたいと思いまして弁天様へ願掛を致して居りますけれども、いまだに知れませんから、本当に私は独りぼっちでございます」

旦「然うかえ、お前が生れて間もなく分れた兄さんだから、顔形も知れまいが親身の兄と思えばこそ然うやって神信心をして会いたいと願掛までして居ればこそ、ふといやなに…屹度会うような事になるに違いないが、その事を兄さんが聞いたら嘸悦ぶだろう、然うかえ……どう云うわけだか松源へ初めてお前を呼んだ時から、何となく私の子のように思われて可愛いと思ったが、妙なものさね」

三「へえ美代ちゃんは久馬様のお嬢さんなんでげすか、道理で初めから久馬様の相が有りましたよ、何かその遊ばせ言葉などの所は違げえねえ、成程七百石のお嬢さまなんで……」

旦「私はお前のお父さんには歌俳諧の道で御贔屓になったこともあり、十九年振でお前に会うとは誠に妙だ……師匠何うも妙だな」

三「まことに妙でげすね……併し何だか大変に陰気になったじゃア有りませんか」

旦「どうか此の娘を身請を致し度いものだ」

と是から美代吉の身請の相談に及ぶ。これが一つの間違いに相成るお話でございます。

二

奥州屋新助が、美代吉を我が実の妹と知りまして身請の相談に及びましたが、娼妓の身請はよく有りますけれども、芸妓の身請は深川ばかりで、町芸妓の身請という事は余り昔は無かったものでございますが、開けて来るので当時は身請が流行でございます。

新「おい師匠々々」

三「へえ」

新「ちょいとお母に君から相談して貰いてえな、何と此の娘を身請えしてえんだが、馬鹿な事を云われちゃア困るんだ、大概相場も有るもんだが、何うだろう、身請をするには何のくらいのものだろう」

三「それは何うも大変に芝居が大きくなって来ましたね、この娘を身請え為すっても御妻君の方は」

新「なに僕がこの娘を受出して権妻にしようてえ訳じゃアねえが、あの娘のお父さんには、昔風流の道で別懇にして御恩を受けたこともあるし、親戚頼りもねえという事だから、あの娘を身請して、好いた男と添わしてやって松山という暖簾でも掛けさせて、何処かへ別家を出して遣りたいのだ、そして久馬様の御位牌を立てさせたいと思うが何うだろう」

三「恐入りやしたねえ、何うも御親切の事で、へえ…併し貴方の御親切を先方で買うと宜いけれども、彼の婆アが中々慾が深いから買いませんて、大きな声じゃア云えませんが、あの通り慾で肥ってるくらいなんですから、身請となると何んな事を云出すか知れませんよ」

新「だからサ、親類交際でおめえから話をしておくれな」

三「へえ、兎に角一つ話をして見ましょう……お母さん〳〵」

婆「はい」

三「ちょいと少し此方へお出でなすって、へゝゝ旦那の前では話し難いんで」

婆「厭だよ三八さん、こんな婆を蔭へ呼んで何をするんだよ」

三「ときにお母さん、外じゃ有りませんが、今旦那がね、美代ちゃんのお父さんと心安くして、むかし御恩になった事もあるてえので、美代ちゃんを身請して松山とか久馬様とかいう暖簾を掛けさせ度いッてんで、何も色に惚れて権妻にするてえような訳では無いので、親類交際の身請てえのでげすが、これは私も思うのにお前の為になると考えます、あの方の事だから身請を為ッ放してえ訳じゃア無いのだからお前も思い切ってお仕舞いなさい、併し盛りの娘を手放すってえのだから無理だが、後の為を考えるとね、実は私もちょいと旦那と打合わした処も有るから、思い切って美代ちゃんを手放して下さいな、娘が出世すると思えば否という訳は有りやすめえ」

婆「まことにどうも有難うございますね……旦那ア本当でございますか……、何だか三八さんは時々おかしな事を言出しますが」

新「実は今師匠にも話したんだが、あんまり贅沢のようでお母さんきまりが悪いが、初めて会った時から何んとなく美代ちゃんが可愛くって仕様が無いから云出したのだが、併し話をするのは今日が初てゞ、何うかしてお父さんのお位牌でも立てさせたいと思い、また私は別に兄弟も何もないから、此の娘を請出して私の妹分に為たいというは、此の娘の様な真実者なら、私の死水も取ってくれようとこういう考えなんだが、親類交際で身請を為てしまったからッて、

何も是ッ切お前の処へ来ないという訳でも無く盆暮には屹度顔を出させるようにします、差支は有りますまいが、また斯ういう雛妓を抱え度いとか、あゝいう出物の著物が有るから買いたいと云う様な時にも、お前さんの事だから差支も有るまいが、然ういう時には金円…また私が御相談をしても善いのだがねえ」

三「旦那が只何うも美代ちゃんが可愛くって、娘か妹のように思われて、丸めて喰ッちまい度い位なんで」

婆「誠に何うもそれは有難い事でございます、実に彼の身の出世でございます、彼も何時までも芸妓をして居ては詰りませんから、能い加減な時分に何うか身を固めさせなければならないと申して居たのでございますが、昔は芸妓を受出すにも造作も無い事でございましたが、今では身請というと実に方々さまの相場が大変な事で…」

三「ほうらそろ〳〵始まった、これだからうっかりした事は云われない……お母さん然う前置から詞を振ずに前文無しで結著の所を云って下さらなくっちゃア困りやすで……旦那あなたの思召は」

と袂の中へ手を入れて、指を握り合って相談をする。

三「えゝ、成程……お母さんちょいと手を私の袂の中へ突込んで下さい、これが流行物だから何うでげしょう、このくらいでは」

婆「はい……誠に有難い事でございますけれども、お師匠さん、私どもは外に宜い抱えも無いのでございます、今美代吉が出てしまえば、何れ誰か外に宜い抱えを為なければなりませんが、そんならばと云って出たから直にお客が附くという訳でもなし為ますから、それでも何うも少し話が折合いませんねえ」

新「じゃアお母さん何うぞ五百円ぐらいの所で話を極めておくんなさいな」

三「お母さん、そんなら宜うございましょう、こんな相場は有りませんから」

婆「誠に何うも有難い事でございます」

新「僕も少し頼まれた事が有ってその実は横浜まで買物に往かなければならんから、それでは明後日という事に極めましょう、何が無くとも赤の御飯ぐらい炊いて、目出度い事だから平常馴染の芸妓衆でも招んでね」

婆「誠に何うも有難い事で、然んなれば是非明後日はお待ち申します……美代吉や、ほんとに御親切なんて、何うもこんな有難い事は有やアしないよ……お間違い有りますまいね」

新「間違える所じゃない、お母さんの方でさい違わなけりゃア、此方で約を違える気遣いは無いのだから」

婆「実に何うも有難い事で、左様なら明後日は何時頃に入らっしゃいます」

新「二時少し廻った時分迄には屹度来るから、其の積りで約定を極めてさえ置けば宜いのだ」

三「美代ちゃん大変に宜い事が有るんで」

と幾ら傍で云っても美代吉は少しも嬉しい顔付が無いというは、本所北割下水に旗下の三男で、藤川庄三郎という者と深くなって居ますが、遣い過ぎて金が廻らなくなったので、有松屋へ行っても不挨拶をするゆえ来にくゝなり、何うも都合が悪いと見えて、茶屋小屋から口を掛ける事もなし、此の頃では打絶えて逢いませんので、美代吉も気を揉んで居る処へ身請の話になり、胸が痛く、

「はい」

と忌アな返事をしました。所へ来ましたのは藤川庄三郎で、此の頃では深川六間堀へ蟄息致して居ましたが、駿府から親族の者が出て来まして、金策が出来、商法の目的を附け、何んな所へでも開店為ようという事に成りましたので、美代吉に悦ばせる心算ゆえ大めかしで、其の頃散髪になりましたのは少なく、明治五年頃から大して散髪が出来ましたが、それでも朝臣した者は早く頭髪を勧められて散髪に成立でございますが、また散髪に成って見まするとこの撫付けた姿を見せたいと、惚れている女には尚変った所が見せたく、黒の羽織に白縮緬の兵児帯で格子の外へ立ち、家の中を覗きながら小声にて、

庄「美代ちゃん宅かえ」

と声を掛けると、美代吉は庄三郎の事ばかり思っています処へ、想う男に声を掛けられ、飛立つばかりいそ〳〵しながら、

美「あい」

と立上るを引き止め、

婆「何だよ、お止しよ、お前お客様が来て入らっしゃる処で、藤川さんだろう、止しなよ、お客様が入らっしゃるから余計な事を云いなさんなよ、出なくっても宜いんだアね」

新「お母さん宜いじゃアないか、前に贔屓で呼んでくれたお客なれば、今美代ちゃんを請出せば私の妹分にも為ようと思っている、その妹を贔屓にしてくれたお客なら私もお近付になりたいから、お上げ申した方が宜い」

美代吉は逢いたいと思う処へこう云われたから、

美「はい」

と直に二畳の上り口へ出て来まして、障子を開けるとて格子の外に立って居まする庄三郎を見て、莞爾と笑いながら、

美「おや宜くおいでなさいました」

庄「今日はね、少しお前に悦ばせようと思って来ました。」

美「余まりおいでなさらんから何うなすったかと思ってましたよ」

庄「なにね深川の方の知己の処に蟄息して居たが、遠州の親族の者が立帰って来て、何か商法を始めようと思うのだ、それに就いて蠣殻町に宜い家が有るから、その家を宿賃で借る積で、品は送ってくれると云うから、その家で葉茶屋を始める事になったので、実は母親に打明けました、云い難かったが思い切って、実は斯々の芸妓が有りますが、あれは腹から芸人じゃア無い事は会津藩の斯々という者の娘でと、すっかりお前の身の上を明した処が、そういう身柄の者なら宜しい、何うせ一人嫁を貰わなければならんから、早く儲けて金が出来たら、お前を貰うように約束して置くが宜いとまでの話になったから、お前に悦ばせようと思って来たのさ」

美「それはまア嬉しい事……種々お話も有りますから、ちょいとお上んなさいよ」

庄「お客かえ」

美「なに私のお父さんと心安い人なんで、四五度私を呼んでくれた人ですが、宅のお母さんと近付に成りたいって来てえるんですよ」

奥から声を掛けまして、

新「何方ですか此方へお上りなさい、お客でも何でも有りませんよ、親類のもので……おい師匠お前ちょいと彼のお方を此方へ」

三「へえ……先此方へお上りなさいまし、一切親類付合で、今ちょいとお酒が始まった処で、これから美代ちゃんのお兄さまになるお方で、へゝゝ何うぞ此方へ入らっしゃいまし……へえ何うも是

は玉柄で、このくらいなステッキは有りませんな、何うも一切違いやすね……さア此方へ〳〵」

庄「はい何方も暫く……えーお母ア誠に御無沙汰をしましたが、少し訳が有って深川の方に引込んでいたので、存じながら御無沙汰になりましたが、今ちょいと御近辺まで参ったから、お訪ね申しましたが、生憎な処へ来てお邪魔をしました」

婆「えゝお茶を上げな……あなたにも此の娘が度々御贔屓で呼んでおくれなすった事も有りますが、明後日から美代吉は宅にいませんよ、こゝに入らっしゃいます美土代町の洋物屋の旦那様が身請をして下さいますので、こんな子供の様なものでございますけれ共、可愛がって身請して下さり、大金を出して引かして下さるので、貴方のような何じゃ有りませんが、随分中には風の悪いお客が、玉の五つ六つも附けて祝儀の少しも出すとね、上手へでも連出して色男振って、ほんとにあなた然うじゃア有りませんか、私も心配した事も有りますよ、明後日からおいでなすった処が婆アばかりで面白くも何とも有りませんよ」

と云い放たれ、庄三郎顔の色を変え、

庄「むゝ左様か…」

と云ったぎり、ぐいと癇癖に障りました、これが奥州屋新助の大難と相成ります。

三

藤川庄三郎は、あれ程深く云い交して置きながら、身請をされるというに今まで一言の言葉もなく、手紙一本送らんで、無沙汰に身請をされるというは不実な女だと思いますと、そこは旗下の若様だけ腹に据兼ね、ぐいと込上げて来ると額に青筋が二本許り出まして、唇がぶる〳〵震え出し、顔の色を少し変え、息遣いも荒く、

庄「お母ア、何も然んなに云わないでも宜い、余まり久しく無沙汰になったから訪ねたのだが、お客様が入らっしってお邪魔になったら帰りますよ、何も然んなに薄情な事を云わないでも宜い……美代吉お前が身請になる事は少しも知らなかったが恐悦だねえ」

美「あれさ身請たって、まだ今話があったばかりで決りもしないのに、あんな事を云って」

庄「なに宜しい、まことに恐悦だ、洋物屋だか乾物屋だか知らねえが、誠に結構だ……何方も甚だ失敬」

新「まア宜しいじゃアございませんか、お母の云いようが悪いから誰でも怒らア、美代吉種々是には話の有る事だから、後で私から話をするから、お前往ってあの方の機嫌を直して帰すが宜い」

美「はい〳〵」

とおど〳〵しながら庄三郎の出かゝる上り口まで参りまして、

美「ちょいと藤川さん」

庄「なぜ出て来た」

美「出て来たって今身請の話が始まったばかりで、何だか訳も解らないのに、あんな事を云って、色でも恋でも有りゃアしませんよ、私のお父さんを歌俳諧の交際で知って居るから、身請をして妹分にして、松山の姓を立てさせて遣り度いって今話があったばかりなんですのに、気前を悪くして腹を立ってはいけませんよ」

庄「なに僕は悪い処へ来ましたよ、他の芸妓と違ってお前は会津藩でも大禄を取った人の娘だから、よもや己を騙すような事は有るま

いと思ったから、一昨日母にも親族にも打明けたのは僕が過まりました、お前はよく今まで己を騙したね」

美「騙す訳も何も無いんです、今急に身請の話が出たのですもの」

庄「身請に成るなら本当に手紙の一本位よこしてもいゝんだ、もう親族にまで打明け、此方で身請をしようという話がつけば何の位金を出すか知れんが、手前だって親族も有るからそれだけに為ねえことはない」

婆「何だえ、その音は、何うしたんだえ、そんなに機嫌を取るから悪いんだ、機嫌を取りゃア宜い気になって、色男振りやアがって、人の家の娘を打ったり叩いたりしやアがる、全体おかしな奴だ、他人の家へつか〳〵這入って、お茶ア飲んで菓子を喰倒しやアがって、ほんとに風の悪い奴だ」

新「師匠美代ちゃんが泣いて居るから見て遣んなよ、お母の云いようも悪い」

三「旦那御心配なさいますな、彼じゃアちょいとグーッとちん〳〵が込上げて来ます、ぽかりとステッキで打ったんでげすが、本当に素敵もないことで」

新「ムン何んだ洒落どこじゃアねえ……美代ちゃん泣いたって仕様がない、こゝへお出で、泣かないでも宜い〳〵、藤川さんだろう、聴いて知って居るから後で兄さんが挨拶を……今から兄さんと云うのは可笑しいが、会って話をすれば、屹度藤川さんの心持も解けようから」

婆「なに宜い、あんな者に上手を遣うからいけねえ……あなた本当に此の娘はお客の前へ出るとはら〳〵する性質でいけません、あんな小悪らしいぎす〳〵した奴は有りません」

新「お母さんの云いようも悪かったよ……お前泣いたりしちゃアいけない、ムウ大層降出して来たな、雨の音が聞えるが、こいつア困ったな。浜まで明日往くにしても、帰らなければ都合が悪いから、人力を一挺云附けておくれな」

婆「はい……併しまア宜いじゃア有りませんか」

新「いや少し頼まれた事も有るので、是非浜へ往って買物を為なければならんから」

婆「然うでございますか、それじゃアはるや、大急ぎで車を誂えよ、仕立は高いから四つ角へ往って綺麗そうな車を見つけて来な、幌の漏らないようなのを、大急ぎで早く往って来な」

下女「はい〳〵」

と下女が有松屋と云うぶら提灯を提げて人力を雇いに往きますと、向うからがた〳〵帰り車と見えて引いて参るを見付け、

下「ちょいと車屋さん〳〵」

車夫「へい」

下女「あの神田の美土代町まで幾許だえ」

車夫「へい一朱と二百で」

下女「高いよ、そんな事を云ったッて余まり高いよ」

車夫「高いたって降って来ましたから」

下女「降って来たって、お負けよ、一朱ぐらいに」

車夫「ヘエ何うでも宜うございます」

とフランケットを身体に巻附け、ずぶ濡になっている車夫が、下女の後からびしょ〳〵附いてまいる所を、藤川庄三郎は丁字風呂の蔭に隠れていたは、愚痴な女に男の未練で、腹立紛れに美代吉を打ん殴って出たが、まだ腹が癒えず、何うも身請をされては男の一分

が立たんと、旧の士族さんの心が出ましたから、小蔭に隠れて様子を立聞くと、奥州屋新助が美土代町へ帰るようだから。

庄「ムウ彼奴が美土代町へ帰るならば宜しいたゞア置くものか」

と煙管筒に合口を仕込んだのを持って居ます。今新助が車に乗る様子を見ていると、表までどろ〳〵送り出し、

皆々「左様ならば、左様ならば」

婆「何うぞ明後日はお待ち申して居りますが、何時頃おいでになりますか」

新「二時頃には来る積りだよ」

婆「是非おいでを……ちゃんと掃除をして置きまして、皆子供たちにも話を致して置きます、左様ならば御機嫌宜しゅう……車夫さん気を附けて成りったけ早くお頼み申しますよ」

車夫「早くたって歩くだけにしか歩けません」

婆「人の悪い車夫だよ、ぶら〳〵歩かれちゃア仕様がない」

車夫「そんなに急がなくっても車が廻るから自然に往かれるんで」

婆「それじゃア車を引くのじゃアない、車に引かれて往くのだ」

新「そんな野暮なことを云うな……ムーン破けてるひどい前掛だなア、愛敬の無え車夫だね……車夫さん幌は漏りゃアしないか」

車夫「大丈夫で」

と是から梶棒の先を掴まえて慣れない奴が持上げて、ごろ〳〵引出したが、何うも思うように走りません。

車夫「はい〳〵」

幾らか頂戴したら早く引きますと云わぬばかりに故意と鈍く引出し、天神の中坂下を突当って、妻恋坂を曲って万世橋から美土代町へ掛る道へ先廻りをして、藤川庄三郎は、妻恋坂下に一万石の建部内匠頭というお大名が有ります、その長家の下に待って居ましたが、只今と違ってお巡りさんという御役が有りません、邏卒とか云って時々廻る方が有った時分で、雨はどっと降出して来ましたから、往来はぱったり止って淋しい秋の雨で、どん〳〵降る中をのた〳〵やってまいる所を、待伏をして居りました庄三郎が、いきなり飛出して提灯を斬って落す。

車夫「あッ」

と梶棒を放して車夫が前へのめったから、急に車の中から出られません、車夫は逃げようとして足を梶棒に引掛け、建部の溝の中へ転がり落ちる。庄三郎は短刀を振翳し、

庄「覚えたか」

と突掛けて来まするとと、覗い違わず奥州屋新助の脇腹へ合口を突き通すという一時に手違いになりますお話でございます、一寸一息継ぎまして後を申上げましょう。

四

えいさて私は夏休みの中、相州箱根から京阪の方へ廻って、久しゅう筆記を休んで居りましたが、申続きの美代吉庄三郎の身の上、奥州屋新助の事が大分に後が残って居りますこれは明治四年のお話でございます。明治四五年頃は御案内の通り頓と未だ開けない世の中では有りますが、漸くに明治五年に此の散髪が流行りまして、頭を刈る時にも厭がって年を老った人などが「何うか切りたく無い、切るくらいなら、寧そぐり〳〵と剃こぼって坊主になった方が善かろう」それを取ッ攫まえて無理に切るなぞという、実に厭がりまし

たものであります。ところが只今では切らんければ恥のような訳で、実に昔切り立てには何故いやな彼んな頭をするか、厭らしい延喜のわりい、とよく笑いましたものであったが、散髪が縁起が悪い頭だか、野郎頭の方が縁起が悪いのかとんと分りませんが、先達て博識の方に聞いたら、前を剃りましたのは首実検の為に剃ったので、大将へ首実検いたさするに指を髻に三本入れた時に（右の手にて攫む）斯う髻を取って大将の前に備える時に死顔が柔かに見える、前が剃って有ると又髻を掴むにも掴み易いと云うので、前髪を剃上げて見せたということだから、以前の頭は余り縁起の好い頭じゃアございません、首実検のための頭だと云います、それから追々剃りまして糸鬢奴が出来ましたが、清元本多と申して幇間やなんかは石垣に蜻蛉の止ったような頭に結いましたもの、只今では散髪に成ったから、風の変え様が有りませんが、此方（右）に曲るとか、或は左の方に撫付けたが宜かろう、中央から取って矮鶏の尾の様な形に致して粋だという、團十郎刈が宜いとか五分刈が彼が宜しいと、粋な様だが團十郎が致したから團十郎刈と云うと、大層名が善いが、よく〳〵見れば毬栗坊主だから悪く云ったら仕方の無いもんだが、あれが流行と成ると粋に見えます。今では前の方にばらりツと下ったのが流行ります、あれはまア乱れて下ったのかと思うと結髪床での誂えです、西洋床の親方なんぞは最う心得て居りますから、先方から、

床「どの位に……」

客「前の方に五十六本」

なんて申したって分りません、仮令長く下げまして、末には目の上にまで被さって、向うが見えないように成って、向うから人が来て、

甲「今日は」

乙「へい（髪を両手にて掻上げ右左と顧る）え、何方です」

なんてえ訳で、両方の手で分けて見たり何かするのは可笑しゅうございますが、其の頃は散髪に成っても洋服を召しても、未だ懐中には煙管筒の様にして、合口の短刀を一本ずつ呑んで居ったもの、されば徳川の禄を食んだ藤川庄三郎、ことには若様育ち、あれ程にまで云いかわし、惚れた美代吉を身請をされては何うも友達へ外聞が悪い、親や親戚に打明けて身請までにと思った処を他へ買取られては一分立たん……と云う血気にはやって分別も無く、妻恋坂下の建部内匠頭の窓下に待って居るとも知らぬ奥州屋新助が、十九ケ年振りで真実の妹に遇い何うか身請をして松山の家を立てさせて、思う男の藤川庄三郎に添わしてやりたいと腹で種々に考えて、明後日は身請をする心持で車夫を急がしても、車夫は成りたけのろ〳〵挽いて、困ると酒手が出たらそれから早く挽こうという、辻車は始末にいかない。幌が少し破れて、雨がぽたり〳〵と漏ります。梶棒の尖端を持ってがた〳〵揺がせて、建部の屋敷裏手までまいると、藤川庄三郎曲り角の所から突然に車夫の提灯を切って落した。車夫は驚いて、どーんと筋斗を打って溝の中へごろ〳〵と転がり落ちましたが、よい塩梅に車が反りません、機みで梶棒が前に下りたから、前桐油を突き破って片足踏み出すと、

庄「思い知ったか」

と組附くように合口を持って突ッ掛りまして、ちょうど奥州屋新助の左の脇腹のところをぷつうりと貫いた。

新「うゝん」

と云いさま、此方も元は会津の藩中松山久次郎…聊か腕に覚が有りまするから、庄三郎の片手を抑えたなり、ずうンと前にのめり出し。

新「暫く〳〵逸まっちゃア成りませんぞ」

庄「なに宜く先程は失敬を致したな、一分立たんから汝を殺し、美代吉をも殺害して切腹いたす心得だ」

奥「暫く〳〵何うぞ……逸まった事をして下されたなア藤川氏…手前は美代吉の色恋に溺れて身請を致すのではござらん、美代吉の真実の兄で松山久次郎と申す者でござるぞ」

庄「へい、なに松山……――美代吉の兄とはそれは又何ういう訳」

奥「フムそれは……まだ〳〵……あッあ斯く成り行くは皆な不孝の罰である……手前二十四歳の折に放蕩無頼で、元の会津の屋敷を出る折に、父が呆れて勘当を致す時に一首の歌を書いて、その短冊を此の久次郎に渡された……それより青森へ参って、北海道へ渡って、暫く函館地方に居ったが、時治まって横浜に出て参って只今では聊か活計の道を立て……これから僕も世に出ようという心得であった……先達て五六度呼んだ美代吉が、何となく温順しやかな身柄の宜しい者である、武士の娘と云う事を聞いたが、時世とて芸者の勤め、皆な斯様に成り果てた者も多かろうと存じて……手前妹と知らず、贔屓にして五六度呼びました……すると美代吉はあなた様と深く云い交してある事を他の芸者から聞きましたゆえ、何うぞして配わして遣りたいと、今日美代吉の宅へ参ってふと見たる屏風の貼交ぜ、その短冊を見れば、父が勘当の折に書いてくれました自筆の……歌でございます……その短冊から段々問い合せますると、松山久馬の娘である、父も兄も相果て、母が病中斯様な処に這入って芸者を致すとの物語を聞き、あゝ己は不孝で、二十四歳の折家出をして、両親に聊かも報恩を致さんで、年はもいかぬ女の身で斯様の処へ這入って芸者を致して居るか、如何にも不便な事であると存じました故に、何うぞ美代吉を身請致して別家を為し、松山の名跡を立てさせたい、殊には貴方様と何うか御相談の上で、不束な妹では有るが、女房に持って貰いたいと存じて、今日身請を致し、明後日は貴方様をお招き申して、何うぞ妹の身の上をも善きに願おうと心得て居ったところが、貴方様がお出でになっても、有松屋の婆が居るから何一つ御相談も出来無い、貴方が思い違いを致して御腹立でお帰りの時も、私は心配して居ったが、まさか手前に、はアッはア……斯様な荒々しい事をなさろうとは思わなかった……併しそれ程までに妹を思召して下さる御心底はアッはア……誠に忝けない、手前此処に金円を所持して居る……此の五百円の金を差上げるから、わが亡い後に妹をお身請なされて、他に親戚兄弟も無い奴と何うかお見捨て無くはアッはア……末々まで女房に持って遣って下さるように願いたい、こゝに金が有るからお渡し申す……エお分りに成りましたか」

聞く事ごとに庄三郎、

庄「はあア左様な事で有ったか」

と。只茫然といたして、どっどと降る中にべた〳〵と坐った。

庄「左様とは心得ませんで……どうも誠に失敬（失敬たって殺しちまっては間に合いませんねえ）何うかお助かりは……」

奥「えいや助からん」

と苦しい中で懐から金を取り出し、

新「……五百円、それに此の金側の時計も別して記のある訳でない、

お持料になされて下さい、他の物は記が有りますから……此処にあなた様が居ると、もし夜廻りの者が参っては相成りませんから、お早く往って、何うぞ早く往って下さい……急にお身請になると感付かれると成りません、一二ケ月経ってからでございますぜ、お早く〳〵」

早く〳〵という声も最う息も急しゅうなりまする様子。此の頃は巡査という役もございませんけれども折々は邏卒という者が廻りました時分で、雨は降りますけれども妻恋坂下、何う成るか此方も怖いのに心急くから、其の儘に藤川庄三郎は、五百円と時計と持って御成街道の方に参りますと、見送った新助は血に染ったなりひょろ〳〵出て、向うの中坂下について、あの細い横町の方に参り、庄三郎に突かれたなり右の手を持ち添えて、左から一文字にぐうッと掛けて切った、此方（左）の疵口から逆に右の方へ一つ掻切って置いて、気丈な新助、咽喉を一つぷつうりと突いて倒れました。左様なことは些とも知りませんのは奥州屋新助の女房、昨夜は新助が帰らんと云うので、

女「旦那さまがお帰りが無いから、早くお前店を開けて、万事気を附けておくれ」

福松という店を預かっている若者が指図をして、店の飾り附をして居ると、門口へ来ました男は穢ないとも穢なく無いとも、ぼろ〳〵とした汚れ切った毛布を巻き附けて、紋羽の綿頭巾を被って、千草の汚れた半股引を穿き、泥足草鞋穿の儘洋物屋の上り端に来て、

男「御免を蒙むる」

福「今其処へ来ちゃアいけない…来ちゃアいけない……今店を出す処だに、何だい」

男「何だって人間だい」

福「冗談云うねえ、今店を明けたばかりの処で其処へ突立って邪魔して居ちゃアいかん、何だア銭貰い」

男「失敬極まる事をいうな……これ銭貰いとは何だ……さ当家の家内に逢いたいんだから是れへ呼んでくんな……おふみを是れへ呼べ」

福「何うもこれは何だろう……お前は一体何処のものだい」

男「何処も何もあるものか、人力車夫の徳蔵という者だと云やア解るから呼んでくれ」

福「呆れて物が云われない、何だって車夫が此処に来てお内儀さんに逢いたいてえのは何ういうわけだ……何ういう縁故をもって云うのだ」

徳「縁故の無い処に云うものか、当家のふみと血を分けたお兄さまで大西徳蔵という者だと云やア分る」

福「はゝあ是れが兄貴のわんちゃん者だ」

と番頭も分りましたから、

福「今お内儀さんはお加減が悪くて寝んで居ります……誠にお生憎様で」

徳「なにお生憎様てえ事が有るものか、塩梅が悪きゃア奥へ通って逢おう、盥へ水を汲んでくれ、足を洗うから」

福「困りますナ何うも、今何うも店の処じゃア困りますからよ、暫くお待ちなすって」

徳「待たなくてよ、逢いに来たんでい」

というに仕方が無いから、番頭は奥に往きまするとと、乳児に乳を含ませて、片手で其処此処片付けて居りました。

福「申しお内儀さんえ」

ふみ「はい」
福「あなたのお兄いさんで徳藏様が」
ふみ「あゝ又来たかい」
福「へいぼろ〳〵したお装で……あなたの前で申上げては済みませんが、実にひどいお服装、御酒の上の悪いてえことを聞いて居りますが、私は存じませんから、何だかと思って、銭貰いならアノ店を明けたばかりだから、其処へ立っちゃアいけないと云ったら、あべこべに剣突を食って、兄上が妹に逢うのだと申しますが、御様子が悪いから……」
富「あの店に置いちゃア困るから、台所で逢うから此方へ呼んでおくれ」
福「へい……貴方さまお内儀さんがお目にかゝりますが、足を洗うのも始末が悪うございますから、裏からお這入りなすって……直に其の蝋燭屋の裏をお這入りなさると井戸の前の処が入口でげすから」
徳「いや店から上って悪いという次第もないけれども、併しながら何処から上っても五分だ……大層代物が店に殖えたな」
福「何うもまことに仕入が間に合いませんで」
徳「なんだア、汝なんどは生利に西洋物を売買いたすからてえんで、鼻の下に髯なんぞを生して、大層高慢な顔をして居ても、碌になんにも外国人と応接が出来るという訳じゃアあるめえ」
福「そんな事は兎も角も、お内儀さんがお目に懸るってますからお早く」
徳「あゝうい此家ア裏ア何処だ……裏ア」
　ぱたり〳〵と此方の羽目に打突かり、彼方の壁に打突かって蝋燭屋の裏に這入り、井戸端で。
徳「此処か、奥州屋の新助の宅は此処かな」
ふみ「お芳や、そこ開けて遣っておくれ……此方だよ、此方へお這入りなさい……あらまア穢い服装でマア、またお出でなすったね」
徳「又だア……其の後は打絶えて……御無音に……何時も御壮健おかわりも無く……大西徳藏大悦奉る」
ふみ「何だね困りますね、朝からお酒を飲んで、お前さんは始終は身体を仕舞いますよ」
徳「何うせ果は中風だ、はゝゝだが酒が一滴も通らなけりア口の利けねえ徳藏だ、予てお前も知ってる通りのことだ、前々勤務をしている時分にも宜しく無いから飲むなてえが、飲まんけりア耐らん、殊更寒い昨夜は雨が降り、斯くの如く尾羽打枯して梶棒に掴まって歩るいたって、雨で乗手が少ない、寒くって耐らんから酒を飲むと、自然と車の輪代がたまって、身代もまわりかねるような事に成って、はゝゝ如何んとも何うも進退谷まってね、誠に済まんけれど金え拾両ばかり貸してくれ」
ふみ「何を……判然仰しゃい」
徳「金を十両拝借致し度いという訳だ」
ふみ「私の処にお金を借りに来られる訳じゃア有りますまい」
徳「訳が有りア謝って来やしねえ、訳が少し無いように成って来たから止むを得ず只誠に重々恐れ入って、拝借を願うというようなマア訳だね」
ふみ「はアお前さんは私とは縁が切れて居ますよ、最う此方へ私の籍を送ってしまえば、奥州屋の者でございますから、兄妹でもお前さんに私がお金を送る訳は有りませんが、今までに二十四度お貸し申したよ」

徳「心得て居ります、再度拝借致しました、併し現在の兄が倒れんとするを救わんというのは何うも道に違って居る、そりゃア縁は切れて居ろうが、血筋は切れん、その何うも兄弟の間柄でもって、他に兄弟の有る訳じゃア無え……重々悪い此の通り（平伏）此の通り恐れ入って居る」

ふみ「何うぞ、お前さんも峯壽院様の御用達では無いか……お前さんは立派な天下の御家人では無いか、お父さんが亡くなると蔵宿は借つくし、拝領物まで残らず売ってしまって、お母さんもそれを御心配なすって、あの通りお逝去になりました、私より他に兄妹は無いと仰しゃいましたけれど、大切な兄妹と思って下さるかは知らないが、其の同胞をお前さんは騙して横浜に連れてって外国人のらしゃめんに仕ようとした事をお忘れなすったか、私が二十一の時だよ」

徳「まことに何うも重々相済まん」

ふみ「貴方は外国人は汚らわしい、日本は日の本だ、神の国だ、外国の人などを入れるなという日光様の教えもあるものを、背いてこんな事をしたからと、自分の惰者を余所にして、毎もあんな事ばかり云いながら、その汚れた外国人のところに一人の妹をらしゃめんにするとって、私を横浜に置去りにして、五十両の手金を持ってお逃げなすった事をお忘れなすったかよ」

徳「いさゝか覚えて居りますな……重々相済まん、何うも仕方が無い、借財で仕方が無えよ、借財でなア」

ふみ「私はお前に置去りにされて、知らない横浜の富田屋さんの家に泣暮して居ましたよ、処へ富貴楼のお内儀さんが一寸富田屋さんへ用が有ってお出でなすって、何ういう訳だと申しますから、是々だって話をすると、あゝいう気性のおくらさんだから、それはお気の毒だと今の旦那に話をして、私の身体を五十円で買われたようなもの、此所に来て居るといって、縁切りで来たのだよ、お前さん其の他にも家の旦那はあゝいう気性だから、お前さんに別に又三十両お上げなすった、もう是切り参りませんと云っても度々来る、それは内証で私も二両や三両の事なら何うにかして上げたが、何度来ても旦那は会いはしない、お前さんも旦那の顔は知るまいけれども、兄さんが借りに来た様子だ、沢山の事でも有るまいから、時々は些と宛小遣を持たして遣るが宜いとお前さんが這入って来ると表から外して出る、貸して遣れと云わんばかりに親切にしておくんなさる旦那の前に対しても、私はお貸し申す訳には往きません、此の盆前に来てお前さん幾許持って往ったえ、二十円持って往ったろう……其の時もう来ないと云ったでは無いか、その口の下から直借りに来るとは実に私は呆れてしまった……貸されませんよ」

徳「まことに済まん、貸されなきゃア致し方がない、無いけれども何うも其の日に逐われて飯が食えんという事に成ったから、まことに何うも困る……何うあっても貸されんか」

ふみ「借りに来られた義理じゃア有りませんよ」

徳「義理も道も心得ては居るけれども、何うも一向仕方が無い」

ふみ「貸せたってお前さんには返す方角はなし、お金を遣れば遣る程お酒を飲んで、只怠けてしまうだけの事で、お前さんにお金を上げると態と酒を飲ましてよいよいにする様なものだから上げませんよ」

徳「よい〳〵……最う是切り来ねええゝッぷ、何うぞ、恐入った妹、妹と云っては縁が切れてるから奥州屋新助殿のお内儀さんに対して

大西徳蔵斯の如くだ（両手を突き頭を下る）矢張是も親の罰だ、親の罰だから誠に何うも困る、うむ最う己は縁が切れたから己にすると思ってもいけない、親、親にすると思って……」

ふみ「なにお前さんは親の家を潰してしまった人だわ」

徳「後生だから」

福「大変大変お内儀さん大変でございます」

ふみ「何だね、仰山な」

福「旦那が腹ア切ったッてえ知らせが……妻恋坂下で旦那が腹ア切って居るって、気が狂ったんでしょうか」

ふみ「旦那が妻恋坂下で腹、まア誰か往って見たのか」

　これを聞くと徳蔵は、

徳「はてな妻恋坂下と云えば昨夜乗せた客だが、あれが奥州屋新助では無いか」

　と気が附いたから少し酒の酔が醒めた。

徳「直ぐに帰るから、些と無くてはいけないから、五両でも三両でも……係り合の事が有って車を置いて来た」

ふみ「何だよ私の家は取込んでいるよ困るね、是でも持って往っておくれ」

　と有合わした小遣を遣り、子供を抱いたり負ったり致して、番頭立合で往って見ると、なさけなき死様だ、常に落著きまして中々切腹する様な人では無いが、何う云う訳か頓と分らない。拠なく此の事を訴えますと、検屍事済になって死骸を引取りまして、下谷の広徳寺に野辺送りをする事に成りましたが、誰が殺したか頓と知れませんで居りましたが、是が自然に知れて来ると云うは、悪い事は出来んものです。一寸一息致しまして。

五

　えゝお話二つに分れまして、数寄屋町の有松屋のお話でございます。芸者屋の商売などと云うものは、外見はずうッと派手に飾って、交際も十分に致し、何処に会が有っても芝居の見物でも、斯ういう店開きが有れば其の様にびらを貼るという様な事でございまして、中々物入の続く商売。殊に暮などは抱子を致して居れば、新しく出の紋附を染めるとか、長襦袢を拵えてやるの、小間物から下駄穿物に至るまで支度を致すというので、大した金の入るものでございます。婆は少し借財の有る処で身請というから、先ず是で宜いと喜んだ甲斐もなく、打って違って奥州屋新助は腹を切って死んだと云うので、ぱったり目的が外れました。是から歳暮に成りまするとし不都合で愚痴ばかり云っている処へ、幇間の三八、

三「お母さん今日は」

婆「おやお這入んなさいまし」

三「押詰りまして」

婆「何うも月迫に成りました、誠に何うも寒い事ねえ、暮の二十五日だからねえ、時々忘年のお座敷なぞが有るかえ」

三「有るにア有るけれども、昔と違って突然に目的が外れたりして極りが無いから困りますのさ」

婆「けれどもお前なぞは気楽で宜いじゃアないか」

三「気楽でも何でも無いのサ、何うも只た一人者でも雇婆アさんの給金も払うなにが無えんで、勘定というものは何処にも有るもんでげすが、暮はいけませんねえ、押掛のお座敷に往っても御祝儀は下

さいませんから誠に困りますよ、お歳暮の時なんぞは御祝儀処か、おやお出でかえ誠に取込んで居るからと云うんで、無しさ、幇間なんどは暮はいけませんなア、来春を待つのですが、お母さんなんぞは土用が来ても歳暮が来ても福々しいね」

婆「何うして大違さ、それに彼の奥州屋の旦那がね、ソレあの時お前も落合って身請ってえから少し苦しい処だから丁度好い塩梅だと極りがついて、明後日は身請というから当にして、私もその支度もし、別に抱えも仕たいと思うからそれに当箝め、借金も返す約束に成っている処が、ぽかりと外れてしまった実に困ったのサ、だがね何うしてあの方があんな死様を為すったろう」

三「解らないよ、泥濘へ踏込んでも、どっこい悪い処へ来たと後へ身体を引いて、一方の足は汚さねえと云う方だが」

婆「それが何うも腹を切るなんてえのは」

三「なに矢張り洋物屋の旦那様でも、元が士族様の果で、何かで行詰った事が有って、義理堅い方だから義が立ないとか何とか云う所からプイと遣ったか、それとも人にねえお前さん好い年をして芸者の身請を致して、女房子の有る身分で了簡方が違おうとか何とか野暮な小言を云った奴が有って、色に溺れるのじゃアない、美代吉の身請を致して、好い亭主を持たせるのだと言っても聞かないで、悪い喧嘩でもしてそう思われたが口惜しいとか何かでプイと腹ア切る気になったのかも知れない、それとも腹ア切るのは容易の事じゃア無え、善々思切ったのであろう、それとも無理な才覚をなすって美土代町のお宅でも悪借金……でもありゃアしないかと思われますねえ」

婆「是が為に外れて私は誠に困って居るが、美代吉は身請が外れて嬉しいと云うような顔をしているのが腹が立ちますわね、此の頃美代吉は外れてから元気が出たよ、あゝいう分らない阿魔っちょだから実に私は途方にくれるんだよ、この暮は本当に困りますよ」

と噂をして居るところへ藤川庄三郎門口へ立ちました。装は南部の藍万の小袖に、黄八丈の下着に茶献上の帯に黒羽二重の羽織で、至極まじめのこしらえでございまして、障子戸の外から、

庄「御免……美代ちゃん宅かえ」

婆「はいお兼や、誰か来たから鳥渡往って見な…表へ誰方かお出でなすったよ」

兼「はい」

女中が駈け出して障子をがらりと開けると庄三郎。

兼「おや入っしゃい」

庄「まことに御無沙汰（挨拶をしながら）美代ちゃんは」

兼「今何でございます、一寸お約束で出ました」

庄「お母さんは」

兼「お母さんは居りますからまアお上り遊ばせ」

庄「はい御免なさい」

婆「おい一寸兼や、何だよ、気の利かない女だよ、藤川さんだよ、無闇に上げちゃアいけねえなア……この節は何うもいけない、余程いけねえ、様子の悪い、それを無闇に上げてさ、居ないと云えば宜いに何だね……最う上ってお出でなすったアね……さア（急に笑い顔）此方へお出でなさい」

庄「お母まことに御無沙汰、一寸来なくちゃアならんのだけれども、駿府の方から親戚の者が出て来て居るもんだに依ってな何や彼やと取紛れて、何うか僕も親族の者が、遊んで居てもいけないからと云

うので、今度商法をね……当節は兎角商法流行で、遠州の方から葉茶を送ってくれると云うので、蝸殻町に空家が有ったもんだから、それを借りて漸く葉茶屋を開店することに極りがやっとついたんで、お馴染には成ってるしするから、悪い耳と違って善い事をお聞せ申したいと思ってね……参ったが、何時もお変りございませんで、次第に月迫に」

婆「まことに押詰りましてさぞお忙がしゅう……おゝそれは結構でございますねえ、大分皆さんが御商法をなさいますが、仰しゃるお茶屋だの料理屋しるこ屋色々な事をしても、素人で真似をしたのは何うも長持のないもんですね、慣れない事てえものはいけませんよ、士族さん方の御商法は何うも外れ易いものでございますから、貴方も一生懸命にねえ……まア御勉強なすってお遣んなさりア宜しゅうございましょう、生憎美代吉は居りませんで」

三八「これは何うも暫く……先達ては失敬をいたしました、今という只今貴方のお噂たら〳〵へヽゝ」

庄「いや私こそ御無沙汰致しました、お母さん、少し御相談が有って来たんだがねえ、些と申し難い訳だから、一寸どんな小部屋でも有りア」

婆「御存じの通の私のとこは小部屋も何も有りませんが、何の御用でございますか、何うか此処で仰っしゃってねへヽ何うも下さいませんと困りますねえ」

庄「実はお前も知ってる通り、知って知らんふりでお出でだろうけれども、実は僕ア道楽てえものは今迄仕た事はねえが、下谷へ来てから誘われて一度遊んだのが病付で、其の後はお前さん処の美代吉さんと私は隠れて遊んだ事もある、お前がそれが為に腹を立って私を寄せ付けんという事も知っています」

婆「そう改まって仰しゃっちゃア困りますねえ、何も寄付けねえ訳は有りませんけれども、お前さんも亦、私は遊びましたよ、はい御存じでござりましょうが、お前さん所の美代吉と隠れて遊んだと仰しゃられちゃ困ります、実はお前さんと美代吉が遊びたいばかりで、それまでは堅い妓でございましたけれども、お前さんに誘い出されて向島くんだりへ往ってさ、二晩や三晩家を明けた事も有ります、それも宜いけど、あんな人の好い奴だからお前さんと遊ぶにも、お前さんだって有り余る身代じゃアなし、身上りをしたり、聞けば他で以て高利を借りて、それも是れもまア稼人のこったから私は何にも云いませんけれども、考えて御覧なさい、私は玉をいくら取り損ったか知れやしない、それもまア私は何とも云いはしないが、お前さんにそう改まって御存じだろうと仰しゃられちゃア、私も困りますよ、はい随分困ります、……知らない振で居ましたが、何うぞ是からは遊んで下さらないように願いたいねえ」

庄「だからお前に苦労させて済みませんから、何うか多分の事じゃア出来ないけれども、母にも打明けて話し、親戚の者にも話したが、美代吉はお前の娘という訳でもなし、云わば抱えで流れ込んで居るという事を知って居るが、此の藤川に身請をさせて貰いたいんだ多分の金円を出せと云っては出来ませんが、何うか身請の処を御承諾を願いたい」

婆「へえゝ、大層お立派な事を仰しゃいますね、それは藤川さんお前さんも惚れている女ですもの、身請をしてお前さんの家へ女房にして置きたかろうさ、お前さんも矢張旗下の若様、私も母でございますから、成ろうものなら美代吉も惚れているお前さんの処へ上げ

たいがね、昔は安かったもの、五十両も有れば出来ました、立派な花魁の身請をしても三百両で出来たがね、それが今は法外の話、五十や六十の目腐れ金では出来ません、相場がねえ何うも誠に申すもお気の毒だが、大した事でございまして、何うしても三四百両のお金がなければお前さん達の何うでも出来る話ではなし、身請をしておくんなさいとも云われません、お前さんも美代吉も惚合ってる中だから出来る方なら私の方から願おうが、それがそれ何うもはいと云う事も出来ないような訳、何しろ事柄が大きいから」

庄「じゃア四百円お金を出せば身請が出来るの」

婆「左様さ四百円有れば出来ますねえ」

庄「屹度それならば身請をさせて下さるか」

婆「そう出ればまア……夢見ていな……恵比寿講の売買の様なお話でございますからね」

庄「実はね、母に打明けて話したら、芸妓の身請は何のくらいのものだろうというから、先ず三百両ぐらい掛ろうと云ったら実は母も驚いて、昔は五十両もあれば出来たものを大分高いと云ったが、実は斯々だと云ったら、まア三百円の金も無いけれども、そうなりゃ身請をしたら宜かろうと、親族から漸くに少し金策が出来て、実は此処に四百円才覚をして来たんだが、此の金で身請をさせて下されば、今日直ぐに書附を取替わして美代吉だけを連れて往きたいが御得心かえ」

婆「あれ、あなた本当のお金……」

庄「本当のお金だって（苦笑）」

婆「まア何うも恐れ入りますねえ、まア何うも藤川さん、本当にあなたまア何うも誠に私やアホヽヽヽヽ（笑）一寸お音信をしたいと思って居りましたけれども、斯ういう忙がしい中で、まア美代吉にも私やアいつでもそう云うの、御贔屓になった方へはお前書けない手でも文の一本も上げなってねえ、それが芸者の当然だと云って、まア子供見た様な者ですから、遂まア存じながら御無沙汰になって本当にね、三八はんそう身請に成ればホヽヽヽヽ、旧が旧でおいでなさるからねえ、一寸お話しにさえなりゃア御親類からお金が四百でも五百でも出来て……そうなればねえ」

三「旦那さんの前で急に機嫌が直ったりしちゃア私まで一寸面顔赤になるが、まアお芽出度うごす、美代ちゃんがお喜びは何のくらいでげしょうか、実は何うも思う男とは添わせたいので」

婆「本当に私も嬉しいから美代吉もさぞ喜ぶでございましょう……、私は斯うなるとね吾が子のような心持がして……お兼やお茶を入れな、ホヽヽヽヽそうして宜いお菓子を取って来な」

と婆は直に機嫌が変りました。是から庄三郎は忽ち四百円で身請をして連れて帰る。強飯を云附けて遣り、箱屋や何かにも目立たんように仕着は出しませんけれども、相応の祝儀を遣りまして、美代吉を引取ってまいる。これから母も得心だから蠣殻町へ店を借受けまして、駿府から葉茶を引いて、慣れん事だが又慣れた者が附きまして、活計も何うやら斯うやら容易に立ちまするようの事に成った。親族も善い縁類も有るから少し足りないからと云えば是れへ往って才覚も出来る、女房も持ってるから融通も附きますと云うので、仲好く其の年も経ちまして、翌年九月までと云うものは極愉快にして暮していたが、唯心に絶えぬのは新助の事です。兄新助のお金で私は斯うやって身請をして、思う女と夫婦に成ったが、美代吉は知らずに居る事の気の毒さよ。ちょうど四日が命日だというので、毎月

四日の日には自分で香花を手向け、仏壇に向って位牌は無いけれども、心の中で回向して居る。九月四日は最う一周忌の命日でございますゆえ、

庄「おいお美代」

美「はい」

庄「今日はお茶の御飯を炊かないか」

美「お茶の御飯は私や嫌、赤のお飯をお炊きなさいな」

庄「まア今日はお前を贔屓にしてくれた美土代町の奥州屋さんの丁度一周忌の命日で、此の間美土代町を通ったら彼処の家は変ってしまって今は乾物屋になった、此処に洋物屋が有ったのだと思うと、余り善い心持のものでも無い、おいらも一度でも遇ったのだから、志だから水菓子でも取って仏壇へお茶でも」

美「きまりだよ、お前さんは奥州屋さんのことをおかアしく云うけれども、私が何も奥州屋さんと交情でも有りはしまいし、あの旦那だって私を色恋で何う斯うという訳ではなし、何かお父さんと歌のことで仲好くして、世話にも成った事があるから、身請をして遣ろうと云った時に、お婆さんが彼んな事を云ったもんだから、お前さんも訝しく思いなさるんだが、私や本当に奥州屋さんばかりは何にもいやらしいことは無いの」

庄「いやさ、いやらしい事が有る無しじゃアない、たとえ何もなくても一度でも呼ばれたお客が死んだと云えば、その命日には線香の一本ぐらい上げるのは、たとえ芸者でも其処が人情じゃアないか、今日は両人で彼の人のお寺詣りをして遣ろうじゃアないか、広徳寺へ往って」

美「広徳寺というのは彼の人のお寺、あんた能く御存じで、何うして知って居るの」

庄「なゝなに此の間他で聞いたのだ、一寸志だから」

美「厭だアね、人…たった五六度呼ばれたお客の死んだ度にお寺詣りするくらいなら、毎日お墓詣りをして居なければなりやアしない詰らないじゃアないか、お止しなさいな」

庄「お前のお母さんのお墓参りをして、帰りに上野の彰義隊のお墓参りをして、それから奥州屋さんのお墓参りに、遊びながら彼方の方へぶら〳〵と一緒に往きな、菊時分だから人が出るよ」

美「まだ大変菊には早いじゃアないか」

庄「今日は紋付だよ」

美「いやだよウ一寸何だねえ」

庄「そうでないて事よ、往きなよ、お前もお母様のお墓参りに往くのなら、紋付の着物であらたまって、香花を手向るのが当前じゃねえか」

　と無理に紋付にさせるのも庄三郎心有っての事です。此方のお美代はそんな事は知りませんが、亭主の云う事故仕方なく紋付を着て。此の節は滅多に着ることが有りません、久しぶりで紋付を着て上等帯を締め、大きな丸髷になでつけまして、華美な若粧、何うしても葉茶屋のお内儀さんにいたしては少し華美な拵え、それに垢抜けて居るから一寸表へ出ても目立ちます。これよりぶら〳〵遊歩を致して母の墓参りをして、上野を抜けて広小路へ参り、万円山広徳寺に来て奥州屋新助のお墓へ香花を手向けて、お寺には縁類の者であると云って附届を致し、出て来まするとぽつうり〳〵と秋の空の変り易く降り出して来ました。

庄「困ったな降って来たよ、何処かへ往ってお飯でも食べて雨を止

めようじゃア無いか」

美「出る時は降るだろうと思ったから、蝙蝠傘だけは持って来たが、沢山の降りも有りますまいか」

　と夫婦で車坂の四ツ辻まで来ますと、後から汚ない車夫が、

車夫「えゝ若し旦那え、帰り車でございますから、お安くお幾許でも宜いんですが……へい何方で、日本橋の方へお帰りですか、日本橋なれば、私も彼方の方へ帰るんですが何方なんですか、四ツ谷の方に、へえ私も牛込の方へ帰りでげすが」

　何処へ帰り車だか分らない。

庄「まア宜い、車が汚いから、あゝ大変に降って来た」

美「私は久振ですから長者町の福寿庵へ往っておらいさんに逢って、義理をして往きたいんですが、帰りに他家へ寄ってお飯を食べるなら、福寿庵へ往って遣っておくんなさいよ」

庄「あゝお前の世話になった以前の御用達の福田か」

美「あの旦那は大層立派に暮しをなさったそうだが、今では御亭主が料理屋を」

庄「おい〳〵若衆さん、あの長者町の福寿庵という汁粉屋な、彼処でお飯を食べて、それから蠣殻町へ帰るんだが、少しの間待ってるようなら御飯ぐらい食わしてやるが」

車夫「えゝ何うも有難うございます、まるっきり今日は溢れちまって、空ア挽いて帰るかと思っていた処で、何うか幾許待っても宜しゅうございます、閑でげすから、お合乗でへい、少し（空をながめる）なんでげすが大した降も有りますまいから、幌は掛けますまい」

　フラン毛布を前に押附けて、これから福寿庵の前に車を下します。車から出て板橋を渡って這入りますと、奥に庭が有りまして、あの庭は余程手広で有りまして、泉水がございます。その向うに離れ座敷が所々に有りまして、客をしますので、馴染のことでございますから。

妻「まア〳〵美代ちゃん誠にまア久しく、いつもお噂ばっかりして居たの、好く……おやそうお寺参り……私もね一寸お尋ね申したいと思っても、御存じの通り一人体で、皆な私にばかり押附けてあるもんだから、私は何処にも出ることが出来ないの……じゃアね奥の六畳の方へ（下女の方をふり向きて）もうお帰りになったろう……汚れて居るか……あゝ、じゃ縁側附の方が宜かろう、あの八畳の方へ御案内申しな」

婢「じゃア此方へ入らっしゃいまし」

　と婢の案内でもって八畳の間に通ります。

庄「何が有る」

　と云うと相変らず、

婢「小田巻蒸に玉子焼、お刺身が出来て塩焼が有ります」

庄「たんとは飲めない口だが一本燗けてくれ」

　と云う中に懐かしいから女房が取巻きに出て来た。

妻「まことにまア御無沙汰……好くねえ」

美代「私も誠に御無沙汰いたしました」

妻「好いことね、此の間も稲ちゃんだの小しめさんも来てね、噂たら〳〵〳〵さ、心掛けの善い人というものは、まア誠に妙なものだ、美代ちゃんのくらい運のいゝ人は無い、世にはとんだ者に騙されて、いくらも苛いめに遭うものが多いのに、自分の思う所に請出されて行って御新造に成ると云う、そんな結構な事は何うも誠にねえ、おや是ゃア御免なさいましよ、始めておほゝゝゝ私アまア浮かりとし

て、只お懐かしいので美代ちゃんの事ばかり……藤川様とか……誠にね、予てお噂には伺って居りましたが……そうでございましたか、遂ね、心安立にもうね、まア美代ちゃん〳〵と言慣けて居るもんですから御新造様の事をホヽヽ、私はがら〳〵して居りまして、そうでございましたか……何うもお二人様ともお雛様を一対列べたようで……御緩くりなすって、今旦那が帰って来ますと自分で手料理が出来ますが、生憎居ないから、まア緩くり遊んで居て下さいな、生憎降って来ましたが大した降りも有りますまいけれども、まア、それに此の間ね新蔵さんがお出でなすったが、その折あなたがお店に坐って居たって、元が元だから商人の店にでも官員でも何処へ出しても本当に上品のお内儀さんだってお噂致して居りました、大層お似合いなすったこと、この丸髷は矢張彼方の方にも芸者衆や何かが居ますから、髪結さんも上手だと見えて大層宜い恰好に出来ました事、いゝ事ね、何て……まだ島田が惜しいようですね、はゝゝ却って凛々しくてね、丸髷の方が宜しゅうございますよ、私はいえ最う（盃を受け）有難う、たんとは頂けません……これから私が参って茶椀蒸を拵えますから」

庄「誠に御馳走様で」

　これから頻りにお酒を飲んで車夫の方にも酒が一本附きましたる事にて、車夫も好い機嫌になって、

車夫「へい旦那様有難う」

庄「あゝお前も草鞋で此処へかけるがいゝ、其方へ踏込まんように」

車夫「えゝ御新造様有難う、何うも閑で仕様のねえ処へ言値で乗っておくんなすって、おまけにお酒やなんかア、まアおいしい物で御飯を頂くなんてえ、こんな間の好い事はねえ、ゲーッ……有難うございます……御新造様アお何歳でごぜいすか、お綺麗でおいでなさるなア何うも……御紋付がすっかりお似合いなさいますな……御新造様の御紋はお珍らしい、こりゃア何だろう、へえ宜い御紋ですな、是は三蓋松てえので、余り付けません、俳優の尾張屋の紋でげすなア」

美代「フヽヽ（笑）野暮な紋だから屋敷や何かでなけりゃア附けない紋で」

車夫「旦那さんの御紋は……花菱だけれども、実の花菱で是も余り人が付けねえ御紋で……えゝえ妙な事があるもんだ、斯う紋がぴったり揃ってるのは不思議だなア……えゝ旦那え、これは（煙草入を懐より出し）実は洋服持の煙草入でげすが、黒桟で一寸袂持の間に此の鉈豆の煙管が這入って、泥だらけになって居るのを拾ったんで、掃除をして私が大切に持って居りますが、実は私どもの持つ物ではございませんから、質屋の番頭だって蔑しやがッて、私どもに有っちゃア仕方がねえ、煙管が何うも実に旦那不思議なんで、私にゃア分らねえが、銀だって云いやすが、この紋がねえ、三蓋松に実の花菱が、そっくり象嵌で出て居るってんだ、こいつア妙じゃアございませんか、これが突込んだ儘で有るんでがすが、悉くりお両方の紋が比翼に付いて居るてえのは何うも妙で、一寸これは何うです旦那……」

　手に取り上げて庄三郎が惘りいたした。まだ是は美代吉には話をせずに自分の心の中の惚気に、美代吉の紋と吾が紋を比翼に附けて誂えた鉈豆の煙管、去年の九月四日の夜、妻恋坂の下で、これは慌てゝ取り落したものだが、何うして此の車夫が持って居るかとぎっくり胸に応えましたが、側にお美代が居るから、

庄「お美代お前と己の紋が有る、似た紋も有るが不思議じゃアねえか、不思議じゃアねえかよ、えゝ悉くり二人の紋が付いてるとは是りゃア不思議じゃアねえか」

美「誰の」

庄「誰のだか分らねえ……車夫さんお前がそれを持とうというのか」

車夫「わっちが持って居たって仕様がねえんでがすが、あなた紋が悉くり附着いて居やすが、お廉く何うか廉くお買いなすって下さりア有難てえんですがな、わっちが質屋なんぞに持って往きますと手数が掛っていけませんや、そっくり貴方の御定紋だから持って入らっしゃりゃア私が是を拾ったとも云いやせんが」

庄「買っても宜いけれども幾許で売ろうてえのだ」

車「こんな物で、幾許でも宜うがす、まア人に聞いた処の価値は五十両が物は有るってえので」

庄「なにが、冗談いっちゃアいけねえ、無垢の煙管の誂えで、何んなにしたって、何う目方が附いたって五十両なら出来るじゃアねえか、こればかりの鉈豆の煙管を五十円遣って買う奴が」

車「たゞの煙管とは違うんで、紋がちゃアんと御新造様の紋とあなたの紋と比翼に付いて居るとこがこいつの価値だ、はゝア誂えりゃア出来るが、わっちが持って居るといけねえものだ、持って居れば拠ろなく訴えなければならねえ、去年の九月四日の晩、妻恋坂下の建部……サだからって」

庄「む……なに」

車「拾った処を云わなければならないが、御迷惑が掛っちゃア済まねえから、売りてえのを我慢して、何うか御当人にお渡し申してえと思って、今まで腹掛の隠に突込んでいた所が、何時までもねエ其の人が知れねえんだ、まア持ち腐れじゃア詰らねえから、旦那御紋所がちゃアんと合って……五十円」

庄「馬鹿ア云っちゃアいけねえ」

美代「お止しなさいな、お止しよ……車夫さん大概におしよ、五十円なんて誰が人馬鹿々々しいじゃアないか、金鈍子か何かの丸帯が買えるわ」

車「帯は買えるんでしょうが、これは煙管の紋が……そりア一寸宜いので」

美「宜いのでたって、そんな高い煙管や何か買える訳のもんじゃアない、だから、あなたお止しなさいよ、（車屋に向い）まア宜いよ」

車「無理に私アお上げ申すという訳じゃござい ませんので、私がこれまで持って居たのは悪いから、それだけ叱られて仕舞いさいすりア……斯ういう訳でがす、私ア酷い目に逢いました、建部の側で私ア溝の中に転がり落ちて何うも物騒で、雨の降る中びしゃアりという訳で、何うも……なアに人てえ者は見掛けに依らねえもんで、まア私は訴えますから」

庄「まア〳〵宜い、若衆さん、買う買わねえは兎も角も一杯此処で飲みねえ、お前も何だろう、腹からの車挽じゃアあるまい家は何処だい」

車「家は無えんで、ふてっくされ猪武者、取っただけは飲んでしまっても仲間の交際と云うものは妙なもんで、何うか斯うか腹ア空れば飯い食ってまア……無理にという訳じゃアないんでげすが、お互に時節柄斯ういう訳になって車ア挽くんで」

美「酔って居るからお止しなさいよ、御飯を食べさせて帰しましょう、酔って車ア挽けやしない、お内儀さんを一寸呼んで、別に車を

誂えましょう」

庄「お前往って呼んで来な、手を叩くと旦那じみて極りが悪いから、一寸往ってお出で、（美代吉の跡を見送り）若衆」

車「えい」

庄「煙管を己が買おうが、今は持合せが無えんだ、己と一緒に……家内が居るから家内の前で高い煙管を何で買うかと思われても困る、金を他に借りる処が有るから、己が一人でお前の車へ乗るから、往ってくれゝば金を借りて渡すから、此の煙管と引替に売って下せい」

車「宜しゅうございます……御新造さんは知らねえのか……いや承知いたしました、万事心得ました」

庄「そんならば」

とて福寿庵の女房を呼び、何やら密々耳こすりを致し、お美代を蠣殻町まで一人で帰す事に相成り、一人乗の車を別に雇い、お美代を先へ帰して置いて、自分は大西徳藏の車に乗って金策に谷中の蛍沢にまいるというお話でございますが、一息つきまして申し上げます。

六

へい藤川庄三郎、彼の大西徳藏という車夫に供をさせて、人力でどっとと降る中を谷中の笠森稲荷の手前の横町を曲って、上にも笠森稲荷というが有りますが、下の方が何か瘡毒の願が利くとか申して女郎衆や何かゞ宜くお詣りにまいって、泥で拵えたる団子を上げます。あの横町を真直に往き右へ登ると七面坂、左が蛍沢、宗林寺という法華寺が有ります。その狭い横町をずうッと抜けると田圃に出て、向うがすうっと駒込の方の山手に続き微かに未だ藪蕎麦の灯火が残っている。田圃道で車の輪が箝って中々挽けません。

徳「旦那いけませんな、こんな道じゃア何うも方が立たねえ、旦那何処へお出でなさるんで」

庄「まア最う少し遣ってくれ」

徳「もう少したって往けませんな、何うもこの道じゃア」

庄「じゃア歩こう、まア此処に下しておくれ、何うしたって金策に往くんだから、お願いだから提灯を持って、車は此処へ置いてお前一緒に往っておくれでないか」

徳「へい、それは何処へでも往きやすがな、私にゃア……唯でさい歩き難い道だに、お前さん何処まで往くんだか知らねえが、困りますな何うも」

庄「だが好い塩梅に少し小降になった」

徳「えい大きに小降に成ったが、何うも降りやすね何うも……旦那去年の九月四日の晩も此様に降りましたな」

庄「うむ左様かなア、去年も降ったのだか覚えねえ」

徳「へん、降ったか覚えねえ、旨く云やアがる、妻恋坂下のね建部裏まで通りの客を挽いて往った時に、ぴしゃアりと提灯を切られた時に私ア胆を潰して、あの建部裏の溝におっこッちまった、好い塩梅に少し摺剥いたばかりでたんと負傷はしないが、泥ぼっけえ、寒くて仕方がねえから、夜明しに這入って酒え飲んで、転がっちゃった、処がその客は私ア縁が切れては居るが、かたづいている妹の亭主だ、それとは知らねえでおまはんから何うも……後は妹一人で仕様が無え、今では横浜へ往って居りやすが、何うも身上を大きく

するくらいの奴は無理な算段でもって店を明けるような事が有ろうが、何うもへゝゝゝゝ、借財がまア多く有ったもんだから店を明けている訳にも往かねえで、今では子供を連れて横浜へ往ってますが旦那、冗談じゃア無え、あの時私ア拾った煙草入だから五十円じゃア安いもんでしょう」

庄「ふむ、おまえは彼時に挽いてた若衆か」

徳「へゝあの時に私ア……、彼奴を殺しておまはん金え奪ったんでげしょう、その金で彼の別嬪を身請をして、惚れた同志が夫婦になって葉茶屋を出してるなんてえ、へゝゝゝ羨しい話じゃア有りやせんか、此方ア未だぶらちゃらして居るんですから直にまア野暮な事を云わねえでさ、面倒だア買っといておくんなせい、五十円で是をおまはんが買って下さりゃア私ア其の金を資本にして一商法、私が宜くなりゃ浜に居る妹も引取って、又お前さんに恩返しの仕られねえでもない、そうすりアおまはんの些たア罪も消えると云うもんだ」

庄「うゝ先刻の煙草入はそれじゃア手許に有るかえ」

徳「ふむ有る〳〵それでねえ」

庄「なアに私が落した煙草入と違っている、紋は実の花菱と云ったが、一寸出して見な」

　車夫の出すのを取って、

庄「提灯を上げて見な」

徳「えゝ是でがす、よく御覧なせえ」

庄「はア此りゃアなんだ違うよ、大変違うよ（懐中に入れる）」

徳「どゝゝゝ懐に突込んじゃいけません、懐に突込んじゃア」

庄「宜いよ、違っても違わんでも彼の時に挽いた若衆と云やア何にも云わず五十円で買おうが、決して他言をしてくんなさんな」

徳「そりゃア必ず云いません、今こそ車夫だが大西徳蔵、聊か徳川の臭い米を食って親を泣かした人間だから、云わんと云ったら口が腐っても云いはしない」

庄「それで安意致した……人が来やしないか」

徳「いや田圃の中で此の大雨、来る人はございやせん」

庄「向うに見える灯火は」

徳「ありゃおまはん蕨蕎麦だよ」

庄「おゝあれが蕨蕎麦か……向うに見えるは」

　と徳蔵に向うへ眼を付けさせて、見ると懐から抜出した合口を把って、力にまかせぶつうりと突いたからばたりと前にのめりました。この騒ぎを少しも知らないのはお美代です。婢は元数寄屋町の有松屋に奉公していたのを、お美代が旦那を持ってから自分の手許に呼んで、昔話をするのを楽みに致して居ります。

美「今帰ったよ」

婢「おやお帰んなさい」

美「お前後生だから折が二つあるから、お皿を三つばかり持って来て……くッついていけないから……それは栗の金団だよ、お前は甘い物が嗜きだから是を上げるよ」

婢「これは私は最う何より旨いと思って居りますよ、それとね姐さんお座敷の時のねえ、あれは何でしたっけね、あの斯うしてそら斯うして丸くって、それ付合せのお肴でございますよ」

美「おゝそう〳〵、むつの子がお前は嗜きだったね、お前に持って来たんだからお食りよ」

婢「ほんとにねえ、あの有松屋の婆さんのように吝い人は有りませ

んわ、何でも食ろという事が有りません、だからねお芋や何か買っても、あなたも知って入らっしゃるけれども、ほんとに何ですのほゝゝゝあなたなんぞは稼人ですからだが、私なんかには焼芋を買っても、一番冷たくなったお尻の方で無くてはいけませんの、あれでお金を溜めたってね、本当にまア悪く云っちゃア済まないが、本当にいまだに覚えて居りますよ」

美「そう〳〵あの時分にお前お砂糖を盗んで甜ていた処を見附かった事があったね」

婢「そう〳〵、あゝ知れませんよ、時々匕で出して甜めました事がありましてね、一遍知れたよ、私が口の端に附着いていて、少しの間板の間に坐らせられた事が有りましたよ……大層結構な、これは福寿庵の、大層お上手ですこと」

美「あの旦那が元御用達で、旨い物は食べつけて居て、それでお内儀さんが元芸者で苦労して、方々の料理茶屋の物を食べて居るから、何うしてもなんだね調理は上手だよ」

婢「そうして旦那様は何処へ……」

美「あゝお金を何うとかと云って往ったよ」

婢「大層遅いじゃ有りませんか」

美「なアに今に帰るだろう、旦那が帰ったら一口召上るかも知れないからね、少しお肴を支度して置いておくれ」

　いくら待っても帰りませんので案じていると、ちーん〳〵という二時の時計。

庄「大きに御苦労〳〵、若衆（車代を払う）……帰ったよ」

婢「はい旦那様がお帰りですよ」

美「あれさ起きなくっても宜いわ、寝ておいでよ……只今明けますから……おや車で、若衆さん大きに御苦労」

車「へい」

美「お茶でも飲んでお出でなさいな、そう大きに御苦労様……あなた余まり遅いからお泊りに成ったのだろうから、私も今寝ようと思った処、あゝ宜い塩梅に一時降ってから小降りに成りましたねえ、それにね蝙蝠傘は漏りはしませんか」

庄「なに車に乗ったから傘は要らなかった。」

美「そう、甚いのに何処まで往っておいでなすったの」

庄「王子の茶園に往って送り込を頼んで来た、二三日中に送り込むだろうが、来なければ又往って遣ろうが」

美「着物が大変泥だらけですね」

庄「えゝ着物か、着換えよう」

美「さアお着換えなさい、何うも是からまアほんとに泥が附いて、ま何うしたんだろう、あら血が附いてますよ」

庄「なゝゝなんだ、あアあのなんだ、こゝ駒込の富士前の方から帰って来たら、青物市場の処を通ると、犬が五六匹来やがって足へ絡まって投げられた、其の時噛合った血だらけの犬が来やがって、己に摺附けたもんだから」

美「あらまア穢いじゃアないか、些と乾しましょう」

庄「あゝ其方の二畳の部屋の方へ出して置いてくれ、穢らしいから……おい一杯酒を飲もう」

　と是から酒を飲んでぐうッと寝てしまった。翌日になって車夫が持って来た煙草入に煙管の事を聞いても、知らんと云い、彼れやそうじゃない、煙管も知らん、と云ってお美代にも隠し置いたから、誰あって知る者は有りませんが、それから翌年に相成りまするが、

一月あたりは未だ寒気も強く、ちょうど雪がどっどと降り出して来ました。幇間三八の腰障子の閉って有る台所に立ちましたのは、奥州屋の女房おふみ、三歳に成る子を負いまして、七歳に成るお豊という子に手を引かれて居ります。駒込片町の安泊に居りまして、切通しの坂を下りてよう〳〵此処まで来る中に二度転んだと云う俄盲でございます。柳川紬の袷一枚、これも何うも柳川紬と云うと体裁が宜いが、洗張りをしたり縫直したりした黒繻子の半襟が掛けてあるが、化物屋敷の簾のようにずた〳〵になって、王子の製紙場へ遣っても宜しいという結びだらけの細帯、焼穴だらけのあめとうの前掛が汚れ切って居ります、豆腐屋の物置から引出したと云うような横倒しに歯の減った下駄を穿いて、ぶる〳〵慄えながら、豊「お母ちゃん、ちゃア此処だよ〳〵」

ふみ「はい……御免なさいまし」

女「はい……おや〳〵いけない……其処を明けちゃアいけない、北向だから、此処の家は風が這入って寒くていけないから……もう出てしまって有りませんよ」

ふみ「いえ私は物貰いではございません、三八さんのお宅は此方でございますか」

女「あゝあ……はい手前でございます……お師匠さん貰人が来ましたよ、一夜明ければ直に来るんだから驚くね何うも」

三八「どなたで……何方で……」

ふみ「はい誠にお久しゅうございます、私は奥州屋の家内で」

三八「へ、へいへいこりゃア何うも御新造……何うもあなたお目が悪くおなんなすって、おゝこりゃアお目が……おい〳〵婆さん、あのね足を洗わなければならない、跣足だ、雪の中を跣足で、なにを湯だよ、洗濯の盥でなくても宜いてば、何を、えい強情張らなくても宜い、知ってるお客様だ、手拭の乾たのを持ってお出で……さ此方へ」

ふみ「はい〳〵恐れ入ります」

三八「まア〳〵そんなことは御遠慮なしに、えい這入って宜しゅうございますとも、なアにそんな事を、此方へお上んなさい、嬢ちゃん大層おみおきくお成んなすった、何ういうまア何ですか、お寒うございましたろう、何処から、駒込から、いやそれは大変でした、さゝ此方へお出でなすって火鉢の側へ、婆さん炭取を持って来て、其方にも火鉢を出しな大勢だから一つの火鉢にかたまる訳にいかねえ、それからお茶を入れて菓子を出しねえ、何い、そう幾つも手が有りませんと、強情ッ張の婆だ……さ此方へ……お変りもございませんで……御難渋の事で、予て承わって居りますが」

ふみ「申し三八さん、私も此様なにおちぶれましてございます」

三「へい誠に御無沙汰致しました、横浜にお出でなさる事は聞きましたが、何うも浜だから一寸お尋ね申す事も出来ず、お目の悪い事も存じませんでしたが、何れ又病院にでもお入りなすってお療治でも致せば」

ふみ「はい有難うございますが、病院へ入りまして、入院中も種々お医者様も御丹誠なすって下すったが、何うも治りません眼と見えまして、もう何も彼も売尽しまして此様なにおちぶれ果てました、私はもう前世の約束だと思って居りますが、親の因果が子に酬うとやら、何にも知りません子供たちにまで（涙をふき）饑じいめをさせます、何方と云って知っている人もございませんで、始めの程は御懇意様やお慈悲深き方から救われましたが、又二度とも参られま

せず、新助がお馴染でございますから、何うか三八さん（厭恣）あなたの処へなんぞ申して参られた訳ではございませんが、能々と思召して、子供を可愛想と思って、少しばかりお恵みなすって下さい（泣伏）昨日から子供達には未だ御飯を食べさせません、今朝程少しばかりお芋を買って食べさせましただけで」

三「おゝゝおや御新造何うも何とはもや、人という者は何うも過ぎて見なけりア事の分らねえもんでげすが、あなたの処は結構なお身代で、旦那さんは一寸お出での時も金側の時計を頼まれ物だとおっしゃって、五つも六つも持っておいでなさる、あの御身代が今のお身の上、三八などは前から貧乏だから格別貧を苦にも致しませんが、良い人ががたりと斯うなるというと誠にお困りなさる、矢張あなたなんぞは結構のお身の上だけに、貧乏に甚く驚くと云うもんで……旦那様が妻恋坂下で三年後に御切腹なすったと云うのだから、これが何うも驚きましたね、何うも」

ふみ「はい、それにねあなた、あの時に人様からお預かり申した大金がございます、それと金側の時計が一つ紛失りました、金もございませんから、若し盗賊にでも取られまして、それであゝいう堅い気性でございまして、はッと取りのぼせましたか、又預り金を取られ申し訳が無いと切羽詰りに成りまして、あゝいうことに成りましたか、もう歿なりまするとと、中々先の貸金は参りませんで、借財も多くございましたから、人様も、道具を運んでしまって、他家へ預けて身代限りを出して仕舞え、そうすりア後で何の様にも身代が出来ると云ってくれたお人も有りましたが、得心づくで借りた借財、何うしてあなた、そんな事が出来ましょう伽藍堂にしてお渡し申して、残らず店の品物まで売り尽しましてお返し申したから、手許へは僅か百二三十円有りましたが、それから私は眼が悪くなり、病院に這入ったり何や彼やで遣い果し、浜でも富貴楼の御夫婦が御親切になすって下さったが、東京に親戚も有りますから、それを力に上りまするとと、昨年の九月其の親戚の者も何ういう因縁でございますか人手に掛って非業な目に遇い、その葬式まで困る中で私が出す様な訳、何処と云って頼る処もございませんから、駒込片町の三春屋と申す安泊りに居りまする」

三「おや〳〵何うも間が悪いと悪い事ばかり出来て、間が善くなると一切何うも善い事ばかり出て来るものだから、又是から悪い事ばかりも有りますまいから、御心配なさんな、わたしはお金も何も無いから、芸者屋へ往きましょう、旦那様から御祝儀を頂いた芸者から勧化帳でなく、小さな一寸した帳面を拵えて往って、志を何程でも、旦那様の何でがす、御贔屓になすった芳町に金八にお豊も御ひいきに成りました、義理が有る処で、先松源と鳥八十、大茂へまいりまして、又下谷の芸妓ではお稲に小〆《こしめ》、小竹、小ゑつ、おみき……兎も角も私が往って貰うような事にしましょう、若い処の芸者や何かは会の義理を出すと思えば貴方一寸びらを拵えても、びらが五十銭に贈物が二円も掛る、大した散財に成るんだもの、それは又僕が何うにも致しやす、何うにか成りますよ、気を落しちゃアいけません、嬢ちゃん何うも温順しくお成んなすったが、何うもお加減が悪うございますか、大層お痩せなすって」

ふみ「なにあなたね、続いて二日ぐらい食べぬ事が有りまして、又食べさして又たたた食べ……（泣沈む）何うもがゞ餓鬼道のようでございますから瘠せます訳でございます」

豊「お母ちゃん、お飯が食べちゃいなア」

三「おゝ〳〵上げます〳〵……婆さんお膳立をしてくんな、な何を、お飯を何うしたと、冷ではいけません温かいのを、お雛さん処へ往って借りて来な、何か無いか家に、何を何処かに往って鳥鍋かよせ鍋でも何でも熱い物でさいあれば……なにを雪が降ってる、雪だってお前春の雪、そんなに寒い事はない……さゝ御飯を」

　これから親子の者にお飯を食べさせたので、大きに温まりがついた。

三「もし男の胴着や何かは女には着悪いが、家には独身者ですから、女が居るには居りますが女の部には這入ねえで、女の大博士に成っちまって、羽が生えて飛びそうな雇婆です、えいまアお前さんは少し此家にお待ちなさい、集めて見ましょう、いけないと云ったらお前さんも御一緒にお出でなさるよう、先方だって人情ですから出しましょう」

　と是から三八は先ず彼方此方を頼み散かして歩くと、立引にア見得張る商売ですから、あの人が幾許出したから、まアわたしも幾許出そうと云うので、多分にお金が集って来ました。

三「もし御新造さん旦那が善い方で物を遣って有るから、旦那の愛敬で何うもお気の毒だ、私にも出さしてくれと云って呉れます、若い芸者衆やなんども、呼ばれた事は無くてもお名を聞いたばかりで出すから、三八出さしておくんなさいと、これが旦那の徳と云うものは恐ろしいもんで、何うも大したもので、是から柳橋と新橋と吉原へまいりましょう」

ふみ「はい〳〵何ともまア……それもあなた様の御親切で」

三「此の他には全で方なしの処には往かれませんが、あゝ善い事が有りますぜ、旦那が一番鼠扈にしてくれた人という者は何で美代吉さんです、是が運の善い人で、自分が惚た男に請出されて、蠣殻町に居たのだが、越して新らしく此の頃建った家を借りて、それが今御徒町一丁目の十六番地へ葉茶屋を出しました、松山園とかいう暖簾を出して、亭主の方が坊ちゃん育ちの善い人だから、それに美代ちゃんは旦那に御贔屓になったんですから……分らねえ奴は有松屋の婆さ、何だかぐず〳〵云いやがって、否なら止しやアがれとも云わないが……それとちがい是は大丈夫だ、先方が大きいから二十円や三十円は出してくれるかも知れないが、まアあなたを連れて行って見せなくてはいけない」

ふみ「何ともお礼の申し上げ様もございません」

三「何う致しまして、何にしろ跣足じゃア往けません、何に仕ましょうか、車をそう云ってお呉れ、此の嬢ちゃんと合乗に乗って三人に成ります、それ故に三人乗ってそろ〳〵挽いて、僕は贅だからぼつ〳〵下駄を穿いて歩いて往く方が便利だ」

　と親切な男で、車を拵えて、余り遠くも有りません御徒町松山園に参り、台所から、

三「へい今日は、夜分晩く出まして、相済みません」

婢「はい入らっしゃい何方様」

三「えい御叮嚀では困ります、数寄屋町の三八で」

婢「勘八さんと仰しゃりますか」

三「勘八ではございません、三八ですとそう仰しゃって下さいまし」

婢「はい、あの何です数寄屋町の雁八さんという方が入らっしゃいました」

三「何うでも間違ってやがらア」

美「そう、おやまア何だね、表から這入れば宜いのに」

三「いえお店の方から這入って茶の壺を引倒した事がございますから……誠に御無沙汰致しました」
美「もし此方へお上んなさいな」
三「お取膳で、八寸を四寸ずつ喰う仲の善さ、という川柳がありますが」
美「何をえ」
三「何でも始めは穢い物を連れて来たが、段々綺麗なお話に成るので……旦那誠に御無沙汰を」
庄「おや、さ、此方へお這入んなさい」
膳を片附けそうにするを無理に止めます。庄三郎は織色の羽織を著まして、二子の茶の黒ぽい縞の布子に縞の前掛に、帯は八王子博多を締めて、商人然としている。かた〳〵の方は南部の乱立の疎っぽい縞の小袖、これは芸妓の時の着替をふだん着に卸したと云うような著物に、帯が翁格子と紺の唐繻子と腹合せの帯を締めて、丸髷に浅黄鹿子の手柄が掛って、少し晴々しい商人の細君然たるこしらえでも自然に垢が脱けて居ります。仲の善い夫婦で、思いに思った仲でございますから、お飯を食べても物を衝き合って食べるが面白いという間柄です。三八も馴染だから、
庄「さ此方へ」
三「旦那追々御繁昌で」
庄「此の間は何うも何ですな、池の端の方へ小僧に持たして遣りました時に多分に買って下さって」
三「いや何でも多量という訳には往きませんが」
庄「なに些とずつでも度々買ってくれる人が有れば善いので」
三「大変に何うも、いえ評判が宜うがす、一つは此方の御新造が御器量が美いからお茶の色がよく出ますとね」
美「あら何うも情が出る、いやな油だ事よ」
三「そういう訳ではない御新造様」
美「御新造様なんて名をお云いな」
三「それ何うも凛々しく成っちまって気が詰ります……おかみさん、誠に何うも御無心に来たんです、芸者衆の処に斯うやって帳面を持って貰って歩いて、金も集りましたが、是では何うも親子三人行立たないので……世帯を持たして何んな商法でもさせたいと思っても お母さんが目が悪いんですから、と云って親の有る者は育児院では入れてはくれますまいから、仕様が無いから、何うか工夫をするにも金さいありア附かない事も有りません、それは他でも有りません、あなたを日頃御贔屓にした奥州屋の」
美「奥州屋の、おや」
三「それ美土代町の新助さん、妻恋坂下の切腹三法南無三法さ」
美「あゝそうかね、それが何うしたの」
三「何うしたって仕ねえって、驚いたね何うも、駒込の安泊に居るってえんで、何だか目が潰れてしまって、本郷の切通しを下りるにも三度とか四度とか転んだが、下へ転がり切らなけりやア、落著いてこれから歩き出すという身の上にやア往かないてえんで」
美「何うぞ此方へお這入りなすって……お初にお目に懸ります、かねてお噂には聞いて居りましたが、さア此方へお這入んなさい……この火をなんして上げな」
ふみ「お初にお目に懸ります、新助はお心安いそうでございますが、私はお目に懸った事も無いに、新助が彼んな訳に成りましてから、だん〳〵零落いたして……親子の難儀を三八さんが可愛相と仰し

やって下さって、此方様まで御無理を願いに上って……お蔭様で親子の命が助かります、誠にお気の毒様で」

庄「お、いゝや御心配しなさんな、三八さん私は何でもお力に成りますから、まア〳〵心配しなさんな」

と庄三郎親子ぐるみ引取って世話を為にやならんが※に云い出してはと庄三郎思案にくれました。お美代は知りませんから此方と是から昔物語になりますと云う、ちょっと一と息。

七

そこでお美代が火鉢に沢山火を取りまして、親子の者を五徳に並べて、たっぷりとした茶碗に茶を入れて出します。有合わしたお菓子を紙に包んで子供にあてがい、

ふみ「おや有難うございます、お構いなすって下さいますな、有難う存じます」

美「おや可愛らしい事ね、女のお子さん、お何歳に成ります」

ふみ「はい七歳でございます、豊と申します」

美「おゝそう親の無い方は温順しいもんですね、可愛いじゃないか何うも、お少さい方は」

ふみ「はい男でございまして、三歳で新太郎と申します」

美「そう、温順しい事ね、叔母ちゃん処に今夜は最う遅いから泊ってお出でよ、泊っても宜いかい」

豊「あゝお母ちゃん、あの叔母ちゃんが泊れと仰しゃるから泊るよ、泊っても宜いかえ」

ふみ「いえもう穢い姿で……何うかお邪魔に成りませんお台所の隅にでもお寝かしなさって、今居ります安泊りのような、あんな穢い処に居るものでございますから、只夜を明かさしてさえ頂けば……これ、そう戴いて直に食べるものではない、お行儀の悪い……久しくお菓子も買って食べさせる事が出来ませんから……こんな育て様は致しませんが、この頃はがつ〳〵致しまして、幾ら小言を申しても、下さると直に食べるので……そんなにお口に入れる者じゃアないよ」

豊「だってもね、わたいは食べたいもの、あの腹が空いてるから」

三「まことにお可愛そうじゃア有りませんか、これが奥州屋のお嬢ちゃんやお坊ちゃんとは思われません……えゝなに子供衆だから気儘いっぱいにさせて置くが宜しい、実に乱暴な児が有りますからな、此の間も私の家に這入り込んで、鍋や何かの物を掴み出して食ったり、種々の器物を放ったりして何うも……それに旦那のない後に此のお内儀さんが正直な気性だから、身代限を出す時にも大概の横著の奴なら、道具や何かは親類にこかして空明にして預けて、後でずうツと品物が廻って来るようにと云うのが普通だのに、残らず店の品物まで売ったという、そうして先方に心配を掛けないなんて……矢張あなたそう〳〵悪い事ばかりはございませんから、まアお眼を…何うか一番上手なお医者さんに診てお貰いなさい、おゝ永田町の伊藤方成先生が、私はあの方に御贔屓になった事がございますから、その中又願いに出ましょう、貧乏人にはお薬をたゞくれるてえんでございますから、私が頂いてまいりましょう、それはお上手な事は、お医者さんがわるいと伊藤さんにかゝると云うくらいだから、内瘴が眼が明いて駈け出したり何かするんで、何うも不思議じゃア有りませんか、それにお嬢ちゃんも七歳にお成んなさりや

ア学校に入れて教育しなくては、そして御親類と申すのは何ういうなんです」

ふみ「はい、私の兄で元徳川の士族でございまして、大西徳左衛門という者の総領で、この兄の名は徳造と申して、これも峯樹院様の御用達をして百俵も頂いて居りましたが、放蕩無頼で、蔵宿には借財も出来、頂戴物やら先祖の遺物まで何も彼も遣い果し、終には私の身体まで売ろうとして、私を騙して悪い処へ沈めようと掛りましたくらいの姦落者でございます、それでもたった一人の兄でございますから、また相談に乗らない事も有るまいと浜から出て来て見ますと、昨年の九月四日谷中の蛍沢という処で非業の死をいたし……

…是も乱暴の罰でございましょうが、殺した奴は何者でございますか、多分御酒を飲んで暴れか何か致して斬り殺されてしまいましたのでございましょう、その検屍の事から葬式も此の難儀の中で私が出す様な事でございまして」

三「へいえ何うもお不仕合せ、なれども御新造さんは根が武士のお嬢さんだから何うもと平常私が申して居りました、一昨年花の時に御新造様の御様子が何うも町人とは違いますと云いますと、旦那が、えゝなアになんて瞞かして仰しゃらなかったが、何うも違うと思って居りました、兄様と云うのは酷うございますね、一体何をしてお居でなさったので」

ふみ「はい、零落まして車を挽いて居りました」

三「車夫を殺して何も盗る訳もないのですからな、何うも中に筒ッぽの古いのが丸めて這入ってるだけですからな」

ふみ「はい、矢張お酒を飲むかなんかして、暴れて斬られたのでしょう……あれが」

三「いえ何うもそれに、あなたの処の旦那の何うも腹切りが、何うしても、分らないというのです、そりゃア何方でも評判です、あのように沈著いて居る方がね何うも」

美「ちょっと三八さん、あの何だね、一昨年の九月四日にね……

贔屓だって情夫でも何でも無いのですが……あの晩にお帰りなさらなきゃア彼様なことは無いものを……あれをお帰んなすった晩だよ」

三「そうですな、何ういう訳でがしょうな、あれは」

ふみ「はい何うも御検屍を願いまして腹を切ったという事には成りましたけれども、もう実は仰しゃる通り沈著者で、種々に分別して、人という者は事を落著け心を静めて見れば、何んな事でも死なずに済むものだと申して、己なんぞは是まで苦労をして来たから何んな貧乏に零落れても困りはしない、又工面が宜く成っても困りはしない、何でも詰らない事をくよ〳〵思うな、心を広く持ってと、一寸寝酒を飲みましては私共の心の落著くように云ってくれまする、貯えて居りました金子は他人の預かり物ですが、それが有りませんでしたから、多分盗賊だろうと思います、それに金側の時計がございません、何うも腹ア切った後で、まさかあんな姿をしている処を盗賊も掛りますまいとは思いますが」

三「そう云えば彼の時に何ですね、乗ってお帰りなすった車夫ね、何だかぶき〳〵した奴ね、車夫さん急いでお呉れったら、急げたって人間の歩くだけきゃア歩けやしないって、私ア忌々しくていまだに忘れられねえ、彼奴が何うもなんとも云えませんよ、何うも変な奴だね、実に何うも腹を切るというは妙ですな、それとも預かり物を取られまして、先方に申訳が無いという堅いお気性で」

ふみ「はい、私の良人は元は会津様の藩中でございまして、少しばかりお高を頂いて居りましたから、今では商人に成りましても武士の心は離れません、あゝ済まないと、堅い気性から切羽詰りに相成って」

美「もしあの奥州屋の旦那様は会津様の御家来ですの、会津様の何というお方、重役のお方でございますか」

ふみ「はい、私も委しいことは知りませんが、お高も余程頂戴致した様子……松山久馬の次男の久次郎と申す者だとよく私に申しました」

美「あらまア、まア何うも、あら松山さんていの、あらまア一寸三八さん旦那は私の兄さんだよ、何うもまア」

ふみ「はゝア、あなたはお妹御あらまア」

美「私がね生れると、道楽で御勘当になったという話をお母さんが死ぬ前に私に申したんですよ、お兄さんは家出をしてしまったッて、私が生れて間もない折ですよ、お兄さんに遇いさいすれば力に成ると思って、私は神信心して居たが……道理で、それ私のお父さんの書いた短冊が貼って有ったら、家へ来て」

三「そう〳〵、そう仰しゃれば思い出した、あの時ぼろりとお泣きなすった……それからあなたの身請の相談、これは本心放埒で、敵を討つ所存はねえに極まったとも云わないが、請け出しに掛った時は変だと思って居りました」

美「だからね兄さんは只可愛がりなすったのだよ、それで無くてあんなに可愛がる筈はありゃアしないね、知ってたから」

三「あの何うもその短冊が何うとか云いましたね、親が何うとかして何うとかだって……あれからお上りになって、それで身請と成ったんでしょう、だけれども間夫が有るなら添わして遣ると、何うも由良之助見ていな事をおっしゃったが、その帰りに與市兵衛見ていに殺されるていのは何うも分んねえ」

美「殺されたのならば私も何うも残念で耐りませんよ」

ふみ「私も何うも人手に掛ったと存じますが、もし殺した奴でも分ったら、眼が見えなくとも武士の家に生れた女、亭主の仇を尋ね探して討ちたい心も有りましたが……あゝ斯様に盲人に成りましては」

美「おゝ不思議な御縁でお目に懸りました、私の兄の女房なら私の為にはやっぱり姉さん、兄さんの敵だって討てない事は有りません、ねえ庄さん、お願ですから若しも敵が知れましたら、藤川さん貴方も以前はお旗下ではありませんか、たとえ女の細腕でも武士の家に生れた私です、一生懸命になりますから、助太刀して、屹度知れたら、敵を捜して討たして下さい」

　というのを聞いて居りましたおとよが七歳では有りますが、怜悧な子でありますから、

豊「お母ちゃん、お父ちゃんを殺した奴が有れば、豊ちゃんも敵を討ちます、この叔父ちゃんに手伝って頂いて、ね叔父ちゃん手伝って敵を討たして下さいよ」

ふみ「あい〳〵よくお云いだ〳〵、死んだお父さんが草葉の蔭で聞いたらさぞお喜びなさるだろう……親孝行の事を云っておくれだ」

三「へい感心々々感心」

ふみ「只今の世の中では敵を討つことの出来ない世の中とは予て聞いては居りますが私は昔風で、何うか敵を討ちとうございます、もし敵が知れたらば私さえ殺されゝば宜しゅうございましょうから、何うぞ敵を討たして下さいまし」

三「まア〳〵感心だ、実に年は往かないが、是は矢張松山さんのお胤だけ有って、私ア聞いて居てぽろりと来ました、いやこれは誰でもポロときますよ、私はね芝居でも世話場でちょっと此様な子役の出る芝居へ往って見物していると、子役が出て母様というと、まだ何だか解らない中にぽろ〳〵と直ぐお出でなさる、誠に何うも恐れ入りました」

庄「三八さん、此の親子の衆は私が引取って又敵を討たせる時も有ろうし、何にしても親切にしておくれで、今夜は雪が降るからお泊め申すから、安心して置いて帰って下さい」

三「有難う、だから此方に参ると申したんです、有松屋の婆さんは出しませんね、何うかお前さん旦那も来て始めて逢った時にもあゝしてくれたんだからと云っても、決してそんな事をする義理合は有りませんと云うような顔附から、慾にばかり目を附ける婆で、彼奴は腹でも切りそうな婆です……まお暇致しましょう、へい左様なら御機嫌宜しゅう」

美「まことにお草々致しました、車でも」

三「えい私の家に帰るんですから、なに車も待たして置きましたから、ちょうどあの車に乗って帰ります、へい左様ならお女中、御新様それじゃお泊んなすって……左様なら」

と三八は帰ってしまう。これから温かい物でお飯を食べさせて、親子の者を丁寧に客座敷の方に寝かして、自分は六畳の茶の間の方に寝ました。夜が明けると、お美代が側に床を並べて寝ていた庄三郎の居ないに驚いた。

美「何処へ往ったろう……旦那は何処かへお出でなすった……兼や（下女の名）旦那はお手水かえ」

兼「いゝえ存じませんよ、先刻から此処で焚き附けて居りますが、知りませんよ」

美「何処へ往ったんだろう」

と呼んでも音も沙汰も無い。はて変だ。と思って二畳の処を開けに掛ると、栓張が支ってあって唐紙が明きません。

美「旦那」

と、揺るとたんにがらりと転げた音がする。飛び込んで見ると藤川庄三郎は何時の間にか合口を取って、立派に腹一文字に掻切って死んで居りました。恟りしたのはお美代。

美「さア皆な起きてお出でなさい、良人が腹を切りました」

というから店の者も出てまいった。店もまだ開けない中でございますが、目の見えないおふみまでも来て子供も死骸に取り縋って泣き出しまする。すると傍の硯箱の上に書残した一封が有ります。これを開いて見ると、

書遺し候我等一昨年九月四日の夜奥州屋新助殿をお久の実の兄と知らず身請されては一分立たずと若気の至りにて妻恋坂下に待受して新助殿を殺害致し候其の時新助殿始めて松山の次男なる事を打明し十九ケ年の年月を経て妹お久に巡り合い身請をして此の庄三郎と夫婦にさせんと存じて約束致し候其の帰り途なり斯なるは不孝の罪持合せたる金五百両は其方様に差し上げ候間是にて妹お久を身請して女房となし松山の家を立てさせくれと今際の頼み其の場は遁れ去り其の金五百円にてお久を身受致夫婦と相成候それ故に苗字を取て松山園と号け居りしが昨夜親子の困難を見殊に助太刀の頼み人は知らねど心の苦しさ又昨年蛍沢にて殺害したる車夫徳蔵は妻恋坂下にて新助殿を殺したる時に乗せたる車夫にて其

の時取り落したる煙草入を所持なし居り是を買いくれよと云いかけられ是非無く殺害したるに新助殿妻おふみ殿の兄御とは露知らず昨夜の物語に始めて知り兄良人の仇申訳相立たず自害致し相果て候我等なき後々は我が財産は松山の御子達へ引渡し候処実証なり松山の家名は二人の子供を以て跡目相続を頼み入り候妻お久は年若故再縁致し候様我は兄貴の仇なり心を残さぬ様に斯書残し候

との書置に皆打驚き、匆々差配人差添えの上で訴えに相成ります。漸く事済になって、此のおふみの子供をもて相続人に相定めまする。又お美代は後、後家を立て通して居りましたという。おふみが死去の後に子供等が引続きまして松山の家を立てまする。御徒町の腹切と人の噂を聞きまして、愚作なれど一冊のお話に纏めました、松と藤のお話でございますが、先ずこれで全尾でございます。

（拠酒井昇造、佃與次郎速記）

青空文庫情報

底本：「圓朝全集　巻の二」近代文芸資料複刻叢書、世界文庫
　　1963（昭和38）年7月10日発行
底本の親本：「圓朝全集　巻の二」春陽堂
　　1927（昭和2）年12月25日発行
※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。
ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返し記号はそのまま用いました。
また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。
底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」、「彼《あ》の」と「彼《あの》」は、それぞれ「其の」「此の」「彼の」に統一しました。
また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わりを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえました。

入力：小林繁雄
校正：松永正敏
2005年10月19日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

松と藤芸妓の替紋

三遊亭圓朝

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　鈴木行三校訂・編纂
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/